

新制中等新國文 卷九

375.9
Mi20
資料室

41768

教科書文庫

4
810
41-1938
200030
2290

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

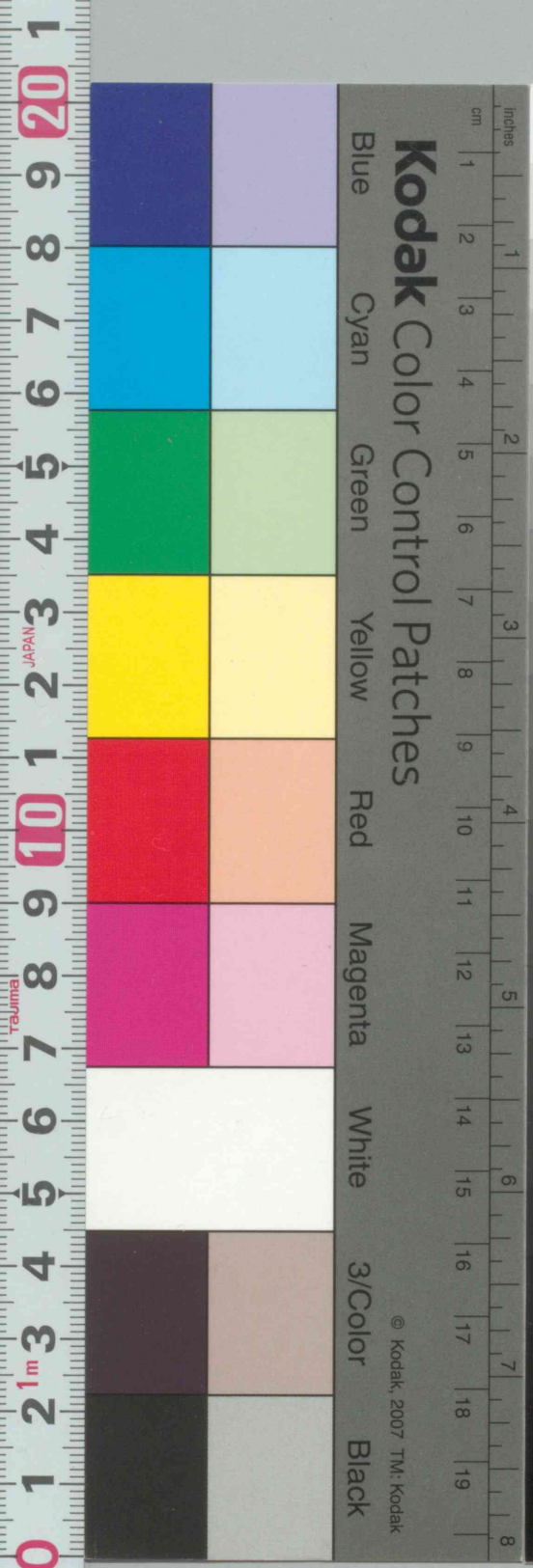
C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



資料室

375.9
Mi 20

濟定檢省部文

科文漢語國校學中 日五十月二年三十和昭
書科教 科語國校學業實

新制中等新國文



編纂者	文學博士	三矢重松
補訂者	國學院大學教授	鳥野幸次
補訂者	御歌所寄人	折口信夫
補訂者	文學博士	

社會文林
社學文



能樂の美(衣羽)

廣島大學
圖書印

能樂の美(衣羽)

廣島大學
教
23892
圖書

例
言

- 一 本讀本は、國語教育が擔へる重大なる使命に鑑み、國家的精神の昂揚と、民族の自覺の上に、大いに裨益せんとするを以て、教材選擇の主眼とす。
- 一 本讀本は、現代文を中心とし、各時代の各種の文體に互りてその代表的作品を網羅し、學年の程度に應じて配列を鹽梅し、以て國語常識涵養の徹底を期す。

目次 (卷九)

一 國文學と國民生活……………藤村 作……………四

二 明治大正の文學……………高須芳次郎……………二一

三 蘭學事始……………杉田玄白……………三三

四 近代の和歌……………本居宣長……………三六

五 古學の復興……………岩城準太郎……………四〇

六 國學者の業績……………村田春海……………四六

七 芳宜園大人の靈を祭る詞……………金子元臣……………五三

八 川柳點……………井原西鶴……………五九

九 世界の借家大將……………近松門左衛門……………六六

一〇 國姓爺……………横井也有……………七

一一 百蟲譜……………

一二 芭蕉と蕪村……………佐成謙太郎……………八六

一三 謠曲と狂言……………(觀世謠本)……………八五

一四 羽衣……………(狂言記)……………九五

一五 入間川……………(太平記)……………一〇四

一六 落花の雪……………(東關紀行)……………一〇〇

一七 東路の旅……………(繪鏡)……………一〇五

一八 おどろのした……………土居光知……………一〇五

一九 隨筆文學の本質……………吉田兼好……………一〇六

二〇 花はさかりに……………清少納言……………一〇九

二一 春は曙……………紀貫之……………一〇五

二二 船路……………久松潛一……………一〇六

二三 文學の新生……………

附錄 國文學史年表

一 國文學と國民生活

藤村 作



文學といふものは、その性質からいへば、詩人・作家が永遠なる或るものを見出して、これを表現する所に本意があり眞の價値がある。

千年前の歌で、今日の我々が讀んでも深い感に打たれ、貴い慰藉を感じるやうな所謂名歌の、いつまでも亡びない所以は、この永遠なるものを擲んで、これをよく表してゐるからである。自然の歌であれば、自然の精髓とか生命とかいふ永遠の相を歌ひ出したものならば、時は如何に移つても、亡びることは容易にあるまい。又人事を取扱つた文學にしても、それが不變な人間性なり人情なりを確に把持して、これを表したものであれば、何時の時代の人にも理解を持たせ、

同情感激を起させて、亡びないものである。人間の生活の外面の相は、時代を追うて色々に變化し、言語・文法もいろ／＼に變遷するから、古代文學は讀み難く、解し易からずなつて行くのは已むを得ないけれども、その變化し行く生活の外面を剥ぎ去り、むづかしく難解になつた言語をよく讀み取つて見ると、其の中に包まれたものは、決して後世の人に通じないやうな、又一時代的で直ぐ亡びてしまふやうなものではなく、今日の我々の靈にもよく響き、我々の生活に共鳴を起さしめるのである。不滅の傑作であれば、必ずさうあるのである。

我々の思想や生活は、時代と共に新しく移つて行くものである。又變化して行かねばならぬ筈のものである。併し全然新しくなるものと思つたら、それは又大きな誤であらう。

藤村 作 明治八年佐賀縣に生る。國文學者。文學博士。東京帝國大學名譽教授。

我々は傳統の影響を受けることが甚だ多い。自分自らは新人と稱し、新しい生活をなして誇つてゐる人でも、存外多分に古い傳統を受けてゐるものである。唯さう氣づかずにある人が多いのである。傳統の中には、後世から批判すれば、すぐれてよいものもあれば、實につまらぬものもある。所謂玉石混淆の有様である。それを知らずにつまらぬ傳統の拘束を受けてゐる人もある。又假令よい傳統を受けてゐる人も、自覺的でないものは、自然これを伸ばして行く力が強くない。

普通教育の上で國語教育國史教育を重んずる理由は外にもあるが、その主なるものは、自國の國民性・國民精神に自覺を持たせることに在る。歐米の各國各民族から、彼の長を採つて、我の短を補ふといふのは、明治維新以來の我が政治

の大方針の一であるが、それは決して生活の外面の事に限られてはならない。採長補短は國民性・國民精神の上までも及ばねばならぬ。一國民の國民性なり、國民精神なりをその古來のものそのままに、石の如く固まつたもの、絶對のものとして考へてはならぬ。それには變遷もあり得べきものであり、又意識的に改善も企つべきものである。唯併しながら、其の中にはその國民に取つて變化改善を許さない絶對的・根本的のものがあり、それがその國民の特徴・長所となつてゐるものであつて、それを涵養して行くことが最も大切であることを忘れてはならぬ。

今日世界の強國を成してゐる國民を見るに、これ等の國民の偉大をなし來つた根柢は、その國民の持つてゐる特殊な性格の極少數の長所を伸長し發展させて來たものであ

ると信ぜられる。それが衰へる時、その國民は衰へ、それを多く失ふ時、その國は滅亡すると思はれる。言ひかへれば、採長補短の道に由つて國民性を養育改善し、國民精神を改良して行くことは肝要であるが、古來傳へ來つて、今日特異なる國家を成し、國民團結の基となり、國民文化を作り上げる上に與つて最も必要であつた國民性の長所を益、磨き立てて、その光を益、發揮させることは、決して閑却すべからざることである。

此の國民性の自覺といふ上に最も役立つものは國文學ではなからうか。國文學を國史と相提携させ、相助けしめて、これを國民の間に普及して行くことに由つて、この國民性の自覺が成されると思ふ。何となれば、國文學といふものは、國民自身が畫いた自家の影像である。自己の傳記である。そ

してそれは偽らざる内面生活の告白である。偽らざる告白なるが故に、道德の標準から見れば、必ずしも善とされるものに限らず、惡とされるものまでも、その儘に表されることが多い。そこに動もすると、文學が社會から嫌はれる理由もあるけれども、亦それによつて國民生活、國民精神の真相を見詰むるを得る便の頗る大であることを考へねばならぬ。その眞の相を見詰むるといふことが、我々が日本國民としての自覺を得る第一歩であると思ふ。

斯う考へて來ると、我々が現代に生まれ合はせて、遠い千幾百年來の國文學を知らうとし、これを研究するといふことは、唯過去の爲に過去を知り、過去の爲に過去を研究せんとする道樂でもなく、遊戯でもなく、物好きでもなく、今日の我々の必要の爲であり、我々自身の生活の爲である。我々が

國民性・國民精神の理解と自覺とによつて、國民としての生活の一步一步を確乎としたものにし、充實したものにし、力強いものにした。爲といふことが出来る。我々が日本國民として、拜外の夢に迷うて何の爲に生きてゐるか、わからぬやうな、あやふやな弱い生活から脱して、強い國民的自信を持つ生活を得たいといふ當然の要求の爲といふことが出来る。

―日本文學聯講―

二 明治大正の文學

高須 芳次郎

明治維新前に於ける江戸末期の時代は、すべてが文化的に頹廢し、行詰つた状態に陥つてゐた。勿論調子は低いながらも、傳統的惰性によつて江戸の風俗乃至浮世繪などには、頹廢しきつた都會情調の色合が現れてゐて、そこになほ一種の懐かしみのある魅力を有してゐた。には違ひないが、清新潑刺たる趣はもう落日のやうに薄れ果ててゐた。殊に文學の如きは文化・文政時代の形式・内容から一步も出ることが出来ないばかりではなく、更に低下してしまつてゐた。かうした停滯萎靡の状態を打破するには、かの明治維新を必要としたのである。それが成功した所以は、主として頹廢を排除し去るべき必然的趨勢に乗じたからである。時はその

高須芳次郎 梅溪と號す。
明治十三年大阪市に生
る。早稻田大學英文科卒
業。歴史家。評論家。

破壊の手を期待し、且建設の時代の新たに來るのを渴望してゐたのであつた。

かやうな「時」の要求によつて、明治の新時代が國民の前に來た。そして、西南戦争の頃までは、空前の大破壊と平行して大建設が要路の新人によつて行はれ、廢藩置縣や徴兵制度の實施や、その他諸種の改革を見たが、舊文化の破壊にも新文化の建設にも、常にその目標となつたのは歐米の文化であつた。

古くわが國の文化が主として支那印度のそれによつて導かれたやうに、明治の文化は多く歐米によつて導かれた。そして、その趨勢が大正十年頃まで續いたのである。いふまでもなく、この五十年間、歐化の度合の上にはおのづから濃淡粗密厚薄の別はあるにはあつたが、概して歐化的傾向か

ら脱却することが出來なかつた。かやうな勢をなすに至つた遠因は江戸末期に胚胎してゐた。幕府の鎖國政策は純日本文化の完成を或程度まで助長したが、それがため、開國に當つて急激に進んだ歐米の文化力に適應して行くべき必要な用意を、國民全體に懈らせることになつてゐた。當時の歐米については少數の識者が心得てゐただけで、しかも、彼等とても多くはロマンチックな想像を抱いてゐたに過ぎなかつた。

江戸末期には蘭學が新知識の媒介であつたので、少壯の人々はそれによつて海外の新文化を徐々にいくらかづつわが國へ輸入した。それと共に、鎖國を外から打破して、一層我と彼との交渉を密接にしようとした最初の國は露西亞であつた。その後、英吉利が來、亞米利加が來るに及んで、忽ち



うに、夙に英米の文化に接觸して、その機構の優れてゐることを高調したのもあつたので、何人も西歐を模倣しなればならぬ大勢が導き出されたのであつた。

由來日本人の文化的機能は海外の新文化に接する毎に敏活に働く傾向を示し、最初に激しい模倣を試み、次にそれを醇化して行く點に特色を有してゐる。江戸末期から明治

時代にかけても、無自覺の歐化から自覺の歐化へ、そして、それが終には純日本的なものを生むべき情勢を示してゐたのであつた。

以上のことから考へれば、明治文化の一分流たる文學が、江戸文學から受けた影響よりも、より多く、より強く、より深く、西歐文學の影響を受けたことを認めなければならぬ。

日本の現代文學にまづ影響を與へたのは英米文學であつた。それは明治初期——元年から十年頃まで——の教育や出版などに徴しても分る。佛蘭西思想も大分鼓吹されたが、それは多く政治方面を目標としたので、文學上にはあまり直接の影響を見なかつた。

明治も十年以後になつて、英語を通じての佛蘭西・獨逸の

福澤諭吉 雪池と號す。大分縣の人。教育家。明治三十四年歿、年六十八。

挿繪 福澤諭吉肖像。

文學の翻譯がやゝ盛んになつた。それは大體興味本位に手當り次第移植されたものが多かつたやうであつた。

明治文學は最初から非常に多く西歐文學の刺戟を受け、このことは、初期に出版された小説らしいものが凡て翻譯であつたのにも見ても分る。その後、明治十八年になつて、坪内逍遙は英文學の造詣から新文學の生ひ立ちに思ひ至つた小説神髓や當世書生氣質を公にし



た。それは新文學生誕の曉鐘ともいふべきものであつた。や、後れて、尾崎紅葉等の硯友社にも英文學に共鳴してゐた人が少なくなかつた。

これらに照らして、日本文學者が創意に乏しいと非難するのは必ずしも當つてゐない。わが文化史上の事實は、いつも自國の文化の停滯をば、海外文化の流入によつて打開することの出來たのを示してゐる。若し新しい文學の世界を自國に求めるのが不可能だとすれば、これを當時の先進たる歐米に求めたのは自然で、また最上の方法であつたに違ひない。殊にその描寫の清新、結構の新奇、人生觀、社會觀上の特殊性などに於て、西歐文學が多くのわが文學者の眼を開いてくれたことは多大なものであつた。

それが明治二十年から三十年頃までの創作全盛時代を現出すべき地ならしをした。それは必要な肥料を施して、沃土を培つた。新しい小説、新體詩、短歌、俳句などは前の翻譯時代に惠まれて、その素地の上に生まれ出たといつてよい。

坪内逍遙 名は雄藏。岐阜縣の人。文學博士。早稻田大學名譽教授。昭和十年歿、年七十七。

挿繪 坪内逍遙肖像。小説神髓 二卷。小説の創作を指導し、藝術上・修辭上より小説の本質を論述したるもの。

當世書生氣質 小説神髓の理論を實地に示したる作品。

尾崎紅葉 名は徳太郎。東京の人。小説家。明治三十六年歿、年三十七。

硯友社 明治十八年二月、尾崎紅葉が山田美妙・石橋思案等と文學の發達を助くる爲に組織したる一社。

三十一年以後、今日に及ぶまでも、わが文壇はやはり海外文學の刺戟を不斷に受けつゝある。そのうちでも、日露戦役前後から世界大戦の終熄する頃までは、明かにその羈絆から獨立するわけに行かなかつた。換言すれば、皆それから強い印象を受けて、すべての新文學が生産された。浪漫主義自然主義神祕主義唯美主義などの文學は、一としてこの例に洩れたものがない。夏目漱石一派の俳諧趣味的な小説でさへも、同じく英文學の感化から脱却しきらぬものがあつた。そして、明治の後半期になつてからは、いはゆる大陸文學が有力な波動をわれに及ぼした。それほど西歐文學の勢力が日本を支配し來つたのである。勿論そこに利弊もあり功過もあつたが、新文學生誕の上に甚大な寄與をなしたことは、寧ろ感謝に値するといはなければならぬ。

夏目漱石 名は金之助。東京の人。文學者。大正五年歿、年五十。

西歐文學が現代文學に與へた影響に比較すれば、在來の日本文學が齎した印象感化は遙に稀薄で、且つ微弱である。そして、その期間もまた連續的でなくて、斷續的であり一時的である。蓋しかやうなことは、歐化的傾向の強い時代にあつては當然のことである。それに現代人は回顧的で保守的であるよりも、前進的で創意的であるのを欲し、なほまた交通上の利便が世界の距離を短縮して、東西相影響する作用を敏活にしたからでもある。

現代文學に影響した日本文學としては萬葉集がある。枕草子がある。近松の淨瑠璃、西鶴、馬琴等の小説、治助、南北等の脚本、芭蕉、蕪村、一茶等の俳諧、眞淵、景樹、良寛等の和歌がある。頼山陽の詩文なども或方面の人々には感化を與へたであらう。その他、數々の隨筆類も、或は一つの素材として用ゐら

治助 櫻田治助。本名中村平吉。江戸の有名な狂言作者。文化三年(西曆)歿、年七十三。
南北 鶴屋南北。近世江戸脚本作家の第一。文政十二年(西曆)歿、年七十五。

れ、或はそこから暗示を得させたやうなことがあつたらう。右のうちで最も有力なのは近松・西鶴等であらう。俳句に及ぼした芭蕉・蕪村や、和歌に印せられた萬葉歌人や、初期の脚本に見える南北等の波動なども極めて著しいものがある。歴史は過去から現在へ、現在から未來への連続である以上、傳統から全然分離することは、文學に於ても許される筈がない。

幸田露伴・尾崎紅葉・樋口一葉等は西鶴に負ふところが多かつた。しかし、いはば單に文體に於て眞似たといふ程度に過ぎなかつた。内容に於けるその深刻さや皮肉などは、何人も容易に到り得ない。西鶴独自の境地である。後に自然主義勃興前後から、その研究が眞面目に行はれるやうになつたが、それでも西鶴の骨髓に徹した作家は一人も出なかつた。

近松を小説に學んだのは島村抱月であつた。しかし、近松はシェークスピアに對照された頃でもあり、かたゞ、それは脚本の方面に一層大きな影を投じ、逍遙に従つてゐた若い劇作家のうちには、この東西の二大名匠の長所を取り入れようと努力したのもあつたらしい。

芭蕉から得た感銘はかなり廣いものがあつた。それは俳壇ばかりに制限されてゐない。北村透谷・島崎藤村等のやうな人々も、内部から強く芭蕉に動かされた。大正に入つてからは、吉田絃二郎は殊に彼に傾倒し、芥川龍之介も室生犀星もその研究に潛心した。芭蕉に於ける寂しみ、清高な人生觀、純な宗教味などは今後益々闡明されると同時に、もつとその色彩を帯びた詩人が現れるかも知れない。

萬葉集の與へた印象も重視すべき價值がある。そこに見

幸田露伴 名は成行。東京の人。慶應三年生る。文學博士。
樋口一葉 名は夏子。東京の人。文學者。明治二十九年歿、年二十五。

島村抱月 名は瀧太郎。島根縣の人。文學者。大正七年歿、年四十八。
シェークスピア 英國の人。第十八世紀の大文豪。

北村透谷 名は門太郎。神奈川県の人。文學者。明治二十七年歿、年二十七。

島崎藤村 名は春樹。明治五年長野縣に生る。文學者。

吉田絃二郎 本名源次郎。明治十九年佐賀縣に生る。文學者。

芥川龍之介 東京の人。文學者。昭和二年歿、年三十六。

室生犀星 名は照道。明治二十二年石川縣に生る。文學者。

る寶玉のやうな眞實と素樸とは正岡子規等を動かしいはゆるアララギ派の諸歌人を出した。

かやうにして現出した文壇は、その視野の廣汎多趣なものとその人材の多く輩出したのみに於て、實に前古未曾有の盛觀である。いはゆる偉大な文藝復興期として、恐らく世界の文學史上にも或輝きを放ち得るものであるに違ひない。これをかの元祿の文藝復興に比するに、それが情の解放に局限されてゐたのに對して、明治の文藝復興は更に智の解放をも併せてゐた。理智の解放……これあるによつて遠く前代に勝れて、そこに日本に於ける近代的陰影の著しいものがある。

〔現代日本文學十二講〕

正岡子規 名は常規。愛媛縣松山の人。歌人。俳人。明治三十五年歿、年三十六。
アララギ アララギ派。正岡子規の根岸短歌會より出てし一派。その主なる歌人は、伊藤左千夫・長塚節など。

三 蘭學事始

杉田 玄白

さて、その日の解剖事終り、とてもものことに骨骸の形をも見るべしと、刑場にありし骨共を拾ひとりて、數々を見しが、すべて舊説とは相違にして、たゞ和蘭圖に差へる所なきに、皆驚嘆せるのみなり。

歸路は、良澤淳庵と翁との三人同行なり。途中にて語り合ひしは、

「諸々今日の實驗、一々驚き入る。且これまで心付かざりしは恥づべき事なり。苟も醫の業を以て互に主君主君に仕ふる身にして、その術の基本とすべき吾人の形體の眞形をも知らず、今まで一日一日とこの業を勤め來りしは面目もなき次第なり。何とぞ、この實驗に基づき、凡そにも身體の眞理

杉田玄白 名は翼。醫師。蘭學者。文化十四年(二四七七)歿、年八十五。
その日 明和八年(二四三二)三月四日。

良澤 前野氏。享和三年(二四六三)歿、年八十一。
淳庵 中川氏。

を辨へて醫をなさば、この業を以て天地間に身を立つるの
申譯もあるべし。」

と、共々に嘆息せり。良澤も

「げに、尤も千萬、同情の事なり。」

と感ぜぬ。その時、翁申せしは、

「何とぞこの『ターヘル・アナトミア』の一部新たに翻譯せば、
身體内外の事分明を得、今日療治の上の大益あるべし。いか
にもして通詞等の手をからず、読み分けたきものなり。」
と、語りしに、良澤曰く、

「予は年來蘭書よみ出だし、度き宿願あれど、これに志を同
じうする良友なし。常々これを慨き思ふのみにて、日を送れ
り。各がたいよ、これを欲し給はば、我が前の年長崎へも
ゆき、蘭語も少々は記憶し居れり、それを種として共々よみ

掛かるべしや。」

と、いひけるを聞き、

「それは先づ喜ばしきことなり。同志に力を戮せ給はらば、
憤然として志を立て、一精出し見申さん。」

と答へたり。良澤これを聞き、悦喜斜めならず。

「然らば善はいそげといへる俗説もあり、直に明日私宅へ
會し給へかし。如何やうにも工夫あるべし。」

と深く契約して、その日は各、宿所宿所へ別れ歸りたり。

その翌日、良澤が宅に集り、前日のことを語り合ひ、先づ、彼
の『ターヘル・アナトミア』の書にうち向ひしに、誠に艦舵なき
船の大海に乗り出だせしが如く、茫洋として寄るべきなく、
只あきれにあきれ居たるまでなり。されども、良澤は豫て
よりこの事を心に掛け、長崎までもゆき、蘭語竝に章句語脈

ターヘル・アナトミア
和蘭語の人體解剖書。解
體新書」の原書。

の間の事も少しは聞き覚え聞きならひし人といひ、齢も翁などよりは十年の長たりし老輩なれば、これを盟主と定め、先生とも仰ぐ事となしぬ。翁は、いまだ二十五字さへ習はず、不意に思ひ立ちし事なれば、漸くに文字を覚え、彼の諸言をもならひしことなり。

さてこの書を読み、如何様にして筆を立つべしと談じ合ひしに、とても始より内象の事は知れがたかるべし。この書の最初に仰伏全象の圖あり。これは表部外象の事なり。その名處は皆知れたる事なれば、その圖と説の符號を合はせ考ふることは、取付きやすかるべし。圖の初とはいひ、かたゞ先づこれより筆を取り始むべしと定めたり。即ち「解體新書形體名目篇」これなり。そのころは「デ」の、「ヘツト」の、又「アルス」「ウエルケ」等の助語の類も、何れが何やら心に落付きて辨へぬ

十年の長 この時良澤四十九歳、玄白三十九歳。二十五字 アルファベット。

事ゆゑ、少しづつは記憶せし語ありても、前後一向にわからぬ事ばかりなり。譬へば「眉」といふものは目の上に生じたる毛なり」と有るやうなる一句、彷彿として、長き日の春の一日には明らかめられず。日暮るゝまで考へ詰め、互ににらみ合ひて、僅か一二寸の文章、一行も解し得る事ならぬことにて有りしなり。

また或日、鼻の所にて「フルヘツヘンド」せしものなりとあるに至りしに、この語わからず。これは如何なる事にてあるべきと考へ合ひしに、いかにせんやうなし。その頃「ウオールデンブック」といふものなし。やうやく長崎より良澤求め歸りし簡略なる一小冊ありしを見合はせたるに、「フルヘツヘンド」の釋註に、「木の枝を斷ちたる迹、その迹フルヘツヘンドをなし、また庭を掃除すれば、その塵土聚まり、フルヘツヘ

フルヘツヘンド 高まる、持ち上がる、等の意。

ウオールデンブック 辭書。

ンドす」といふ様によみ出だせり。これは如何なる意味なるべしと、又例の如くこじつけ考へ合ふに、辨へ兼ねたり。時に翁思ふに、木の枝斷りたる跡癒ゆれば堆くなり、又掃除して塵土あつまればこれもうづたかくなるなり。鼻は面中に在りて堆起せるものなれば、「フルヘッヘンド」は堆つたかといふことなるべし。然ればこの語は「堆」と譯しては如何といひければ、各之を聞きて甚だ尤もなり、「堆」と譯さば正當すべしと決定せり。その時のうれしさは何にたとへんかたもなく、連城の壁をも得し心地せり。

此の如き事にて推して譯語を定めり。其の數も次第次第に増しゆく事となり、良澤のすでに覺え居し譯語書き留をも増補しけるなり。その中にも「シンネン」などいへる事出でしに至りては、一向に思慮の及びがたき事も多かりし。これ

連城の壁 秦の昭王が十五城と交換せんとしたりといふ趙の惠王所藏の名玉。

シンネン 精神。

らは亦往々おとは解くべき時も出来ぬべし。先づ符號を付け置くべしとて、丸の内に十文字を引きて記し置きたり。其の頃知らざることをば「轡十文字」と名づけたり。毎會いろ／＼に申し合はせ、考へ案じても、解すべからざる事あれば、その苦しきの餘り、それもまた「くつわ十文字」「くつわ十文字」と申したりき。然れども爲すべき事は固より人にあり、成るべきは天にあり。の喩の如くなるべしと、此の如く思ひを勞し、精を研り、辛苦せしこと一ヶ月に六七回なり。その定日は怠りなく、わけもなくして各、相集り會議して讀み合ひしに、實に不味者は心とやらにて、凡そ一年餘も過しぬれば、譯語も漸く増し讀むに隨ひ自然と彼の國の事態も了解する様にて、後はその章句の疎そき所は、一日に十行も、その餘も、格別の勞苦なく解し得るやうにもなりたり。尤も毎春参向の通詞ど

もに聞き糺せし事もあり。又その間には解屍の事もあり。獸畜を解きて見合はせしも度々のことなりき。

この會業怠らずして勤めたりし中、次第に同臭の人も相加はり寄りつどふ事なりしが、各志す所ありて一樣ならず。翁は一たび彼の國の解剖の書を得、直ちに實驗し東西千古の差ひあることを知り、明らめ、治療の實用にも立て、世の醫家の業にも、發明ある種にもなしたく、一日もはやくこの一部を用立つ様になし見度しと志を起せし事ゆゑ、他に望む所もなく、一日會して解する處はその夜翻譯して草稿を立て、それに就きてはその譯述の仕かたを種々様々に考へ直せし事、四年の間、草稿は十一度まで認めかへて板下に渡すやうになり、遂に「解體新書翻譯」の業成就したり。

抑、江戸にてこの學を創業して「腑分」といひ古りしことを

新たに「解體」と譯名し、かつ社中にて誰いふとなく蘭學といへる新名を首唱し、我が東方（ほんとう）闔州（かんしゅう）自然と通稱となるにも至れり。是れ今時のごとく隆盛となるべき最初嚆矢なり。今を以て考ふれば、これまで二百年來彼の外科法は傳はりしなれども、直ちに彼の醫書を譯するといふ事は絶えてなかりしが、この時の創業不可思議にも、凡そ醫道の大經大本たる身體内景の書、その新譯の起始となりしは、不用意を以て得る所にして、實に天意とやいふべし。

〔蘭學事始〕

蘭學事始 二卷。回想錄。
文化十二年、即ち杉田玄白が死歿の三年前八十三歳の時の作。

近代の和歌

富士のねにのぼりてみれば天地はまだいくほど
もわかれざりけり

下河邊長流

藻鹽焼くなにはの浦の八重がすみひとへは蟹の
しわざなりけり

釋契沖

ますらをや折にふれては猛り猪のたけき心のな
どなかるらむ

荷田春満

信濃なる須賀のあらのを飛ぶ鷺のつばさもたわ
に吹く嵐かな

賀茂真淵

うらくとどけき春の心より匂ひいでたる山
櫻ばな

同

見わたせば天の香具山畝傍山あらそひ立てる春

がすみかな

同

さしいづるこの日の本の光よりこまもろこしも

春をしるらむ

本居宣長

敷島の大和心を人間はば朝日にほふ山ざくら
ばな

同

二見瀉こちふく風にあけそめて神代のまゝの春

は來にけり

橘千蔭

なづな咲く春のにはひに暮れかねて霞にのこる

春の山畑

村田春海

大井川月と花とのおぼろ夜にひとり霞まぬ波の

音かな

小澤蘆庵

釣絲に吹く夕風の末みえて入日さびしき秋の川

づら

清水濱臣

下河邊長流 本姓小崎氏。大和國の人。近世古典派の歌人。貞享三年(二三四六)歿、年六十三。

釋契沖 近江の人。大阪に住す。學僧。近世古典研究の基礎を確立せる偉勳者。元祿十四年(二二三六一)歿、年六十一。

荷田春満 山城國伏見稻荷山の祠官。近世古典復興を唱へたる偉勳者。國學四大人の一。元文元年(二二九九)歿、年六十八。

賀茂真淵 縣居と號す。遠江國の人。古學の復興と萬葉風の歌風樹立の功勞者。國學四大人の一。明和六年(二四二九)歿、年七十三。

本居宣長 次課註參照。

橘千蔭 加藤氏、號は芳宜園。眞淵の門人。歌文に長ず。又、書をよくし、千蔭流を創む。文化五年(二四六八)歿、年七十四。

村田春海 琴後翁と號す。江戸の國學者・歌人。文化八年(二四七一)歿、年六十六。

小澤蘆庵 名は玄中。尾張の人。京都に住す。徳川期新派短歌の先蹤ともいふべき人。享和元年(二四六一)歿、年七十九。

清水濱臣 泊瀬舎(サ、ナミノヤ)と號す。江戸の人。村田春海の門人。文政七年(二四八四)歿、年四十九。

照る月の影のちりくる心地して夜行く袖にたま
る雪かな

香川景樹

風は清し月はさやけしいぎ共に踊りあかさむ老
のなごりに

釋良寛

月よみの光をまちて歸りませ山路は栗のいがの
多きに

同

たのしみは珍しき書友に借り始め一ひらひらき
たるとき

橘曙覽

月にこぐ海士のとも舟ほの見えて響くも清し初
雁のこゑ

加納諸平

いもが背にねぶるわらはのうつゝなき手にさへ
めぐる風車かな

大隈言道

山里は松の聲のみ聞きなれて風吹かぬ日は淋し

香川景樹 因幡國鳥取の人。始め林氏、後に京都の香川氏を嗣ぐ。最も和歌に長じ、桂園派の祖たり。天保十四年(二五〇三)歿、年七十六。
釋良寛 越後國出雲崎の生れ、歌僧。天保二年(二四九一)歿、年七十五。
橘曙覽 越前國福井の人。歌人。國學者。明治元年歿、年五十七。
加納諸平 遠江國の人。國學者。歌人。安政四年(二五一七)歿、年五十二。
大隈言道 福岡の人。徳川末期の歌人。明治元年(二五二八)歿、年七十一。

かりけり

大田垣蓮月

立てそむる志だにたわまずば龍のあぎとの玉も
とるべし

大國隆正

焼太刀のとさの遠山さやかに初雪ふれり土佐
の遠山

八田知紀

いくそたびかき濁してもすみかへる水やみくに
の姿なるらむ

同

世の中は八重山吹の花ごころ實なきことの
もてはやすかな

足代弘訓

川の瀬に洗ふかぶらの流れ菜を追ひあらそひ
てゆくあひるかな

野村望東尼

大田垣蓮月 俗名誠。京都の人。女流歌人。明治八年歿、年八十五。
大國隆正 初め野々口氏。江戸の人。國學者。明治四年歿、年八十。
八田知紀 桃園と號す。鹿兒島藩士。歌人。明治六年歿、年七十五。
足代弘訓 伊勢の人。國學者。安政三年(二五一六)歿、年七十三。
野村望東尼 名はもと。勤王家。慶應三年歿、年六十二。

五 古學の復興

本居 宣長

一 縣居大人の御さとし言

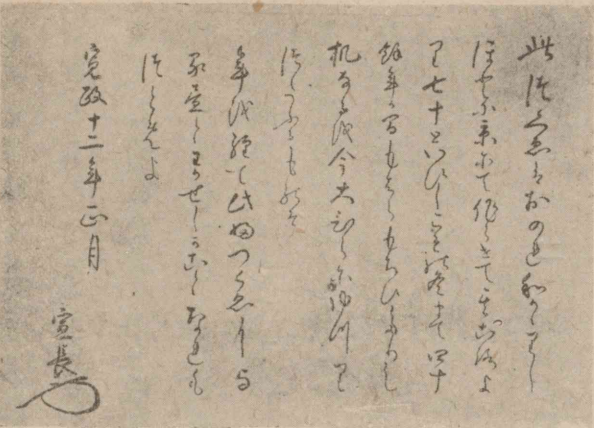
物をつかさどる人の稱

宣長三十あまりなりしほど、縣居大人の教をうけたまはりそめしころより、古事記の注釋を物せん的心ざしありて、そのこと大人にもきこえけるに、さとし給へりしやうは、われももとより神の御ふみをとかんと思ふ心ざしあるを、そはまづからごころを清くはなれて、古のまことの意をたづねえずはあるべからず。然るに、その古のころをえんことは、古言をえたるうへならではあたはず。古言をえんことは、萬葉をよく明らむるにこそあれ。さる故に、我はまづもはら萬葉を明らめんとするほどに、すでに年老いて、のこりのよ

本居宣長 鈴廼舎と號す。伊勢國松坂の人。賀茂眞淵を師とす。國學四大人の一。享和元年(二四六一)歿、年七十二。

宣長

はひ今いくばくもあらざれば、神の御ふみとくまでにいたることをえざるを、いましは年さかりにて、行くさき長ければ、今よりおこたることなくいそ



めて、まづひききとこころよりよくかためおきてこそ、高きと

挿繪 本居宣長筆蹟。

此つくまはおのれわか、りしほどに京にて作らせ、て其ころより七十といひし。その冬まで四十餘年の間もはらもちひたりし机なるを今大ひらにゆづりつたふるもの。その年を経て此つくまによる畫とわかせしかことなれもつとめよ。寛政十二年正月

宣長

ころにはのぼるべきわざなれ。我がいまだ神の御ふみをえとかざるは、もはらこのゆゑぞ。ゆめしなをこえてまだきの高きところをなのぞみぞ。」と、いとねもごろになんいましめさとし給ひたりし。この御さとし言のいとたふとくおぼえけるまゝに、いよ／＼萬葉集に心をそめて深く考へ、くりかへし問ひたゞして、古のこゝろ詞をさとりえて見れば、まことに世の物しり人といふものの、神の御ふみ説ける趣は、みなあらぬからごころのみにして、さらにまことの意は、え得ぬものになんありける。

二 古學と縣居大人

漢意を清く離れて、専ら古の意詞を尋ぬる學問は、我が縣居大人よりぞ始まりける。その大人の學の未だ起らざりし

程の世の學問は、歌も唯古今集よりこなたにのみ止まりて、萬葉などは唯いと物遠く、心も及ばぬものとして、更にその歌のよきあしきを思ひ、古き近きを辨へ、又その詞を今の己がものとして使ふことなどは、凡て思ひも及ばざりしことなるを、今はその古言を己がものとして、萬葉ぶりの歌をも詠み出で、古ぶりの文などをさへ書き得ることとなれるは、専らこの大人の教の功にぞありける。今の人は唯おのれみづから得たるごとと思ふめれど、皆この大人のみ蔭によらずといふことなし。又古事記書紀などの古典をうかゞふにも、漢意に惑はされず、先づ専ら古言を明らめ、古意に依るべきことを人皆知れるも、この大人の萬葉の教のみ賜にぞありける。抑かゝる尊き道を開き初められたるいそしみは、世にいみじきものなりかし。

―(玉かつま)―

玉かつま 十五卷、本居宣長の隨筆。

六 國學者の業績

岩城 準太郎

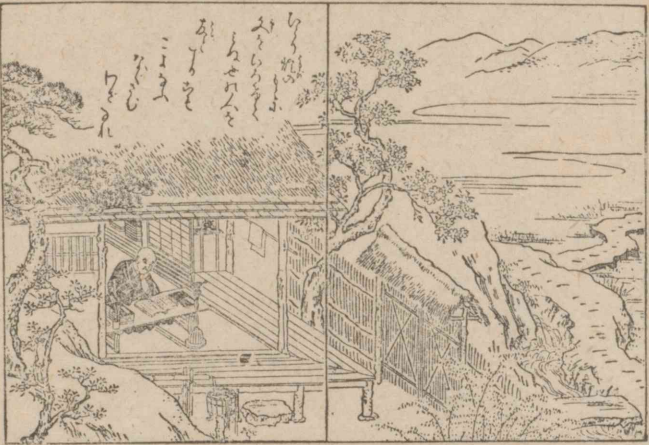
「獨り燈火の下に書をひろげて、見ぬ世の人を友とするこ
そ、こよなう慰むものなれ。」とは徒然草の名文句であるが、人
間と人間とが相互に肺肝を吐露して眞實に諒解するのは、
言語・文章の媒介によるのである。まだ見ぬ世界の人と魂相
通ずるを得るのは即ち「ふみ」のおかげである。

國と國と相知り、國民と國民とが相理解するのは、外交と
貿易とだけによるのではない。相互に他の文章を読むこと
による。矯飾と辭令とを剥ぎ去つた赤裸の國民は、その創作す
るところの文學に最もよく活躍するからである。

一國の國民がその祖先と相面接する思をするのは、過去
の國民の書き残した文學を読む時である。父祖の遺文に接

岩城準太郎 明治十一年富
山縣に生る。國文學者。奈
良女子高等師範學校教
授。

する時の懐かしさはいふまでもない。江戸時代の國民、鎌倉



室町時代の國民、平安時代の國
民、更に溯つて上古太古の國民
の、その時代時代に創作した文
學を繙く時こそ、本當に我が血
脈の生々相繋がる宿縁を直感
するのである。

古代國民の面影を髣髴しよ
うとするには、直接古代國民の
創作したものに當らねばなら
ぬ。その思想を知り、その感情を
解し、その生活に直面しよう
とするには、一意その遺作・遺文を味讀するに限る。我が國民の

挿繪 繪本徒然草。

固有せる生活の真相を、生き生きと今日の我等に見せてくれるのは、即ち古典である、古文學である。

歲月の久しきに随つて遺文遺作が亡びる。時代の古きに随つて文筆の人が少ない。歴史あつて以來三千年、上世に溯れば、溯るほど、典籍が稀になるのである。この稀に存する古文學こそ、本當に貴重な古代の鏡である。祖先の面影を窺ふべき大切なフィルムである。これを書き残した上世の文學者は、數多いその代の國民から、特に選り上げられた極めて少數の代辯者であつて、風雨千歳の淘汰を経て今日に傳はつた古典は、眞に天佑によつて生命を全うした稀代の珍寶である。

かう見て來ると、古典の研究はたゞに古物いぢりの物好きでないのみならず、學問のための學問といふやうなのみ

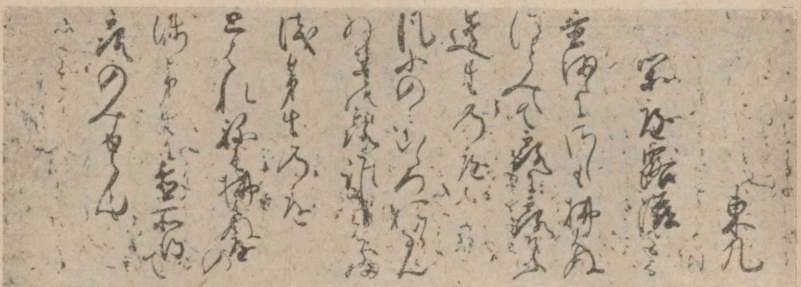
きなものでもない。必要だの不必要だのといふ理窟の問題でもない。實に我等の衷心の要求からやむにやまれぬ感情の問題である。如上の意味において、自分は古典に對して限りない愛敬を捧げ、探究の念を起すのである。この點に着目し、かくの如き見解から、古典の研究を開始したものは、即ち我が國學者である。

國學者といふ名は可なり廣い意味に用ゐられ、隨つて曖昧な意味に用ゐられてゐる。國文學者、國語學者にも、國史學者、古典學者にも、神道家、皇道家といふやうな方面にも用ゐられてゐる。しかしこゝで國學者といふのは、國文學の創作家でもなく、國語の研究家でもなく、歴史家でもなく、また神道家でもない。すべてこれ等の一面を具へてはゐるが、その本領とするところは、國民的精神をもつて固有の國民生活

を闡明しようとするので、その根本資料として我が古典古文學を研究する人々である。即ち古典を通じて國民を見ようと努める學者である。

國學といふ言葉は、古く平安朝の文書菅家遺誠などに見えてゐるけれども、それは意味が違ふ。上述の意味の學風は對外的に國民としての自覺が生じて後でなければ起らぬ。佛學あり、漢學あり、こゝに國學が起るので、漢學が漢土の道を講じ、佛學が佛敎の道理を説くので、こゝに我が國の古道を闡明しようといふ要求が起る。神道の興起はこの要求と關係はあるが、近古時代の神道は、研究の方法を誤り、頭腦の向け方を知らなかつたから、まだ國學といふ特色的なものにはならなかつた。やつぱり學術的研究の實力が出来て來るのを待たねばならなかつた。

菅家遺誠 菅原道眞の遺著といふ。人倫の敎誡三十餘條を示したるもの。



近世江戸時代になつて、學問が始めてその體裁をなして來た。漢學にも、佛學にも、學者と名づくべき者が出来た。特に漢學の勢が盛んであつた慶長年間、漢學興隆の施設をなしてから約百年、これに刺激せられて國學も始めて現れた。國學者なるものの出たのはそれからである。國學の言葉を新しい意味に用ゐたのは、荷田春滿だといはれてゐる。春滿は伏見稻荷の神官であつて、享保十三年、京都東山に學校を創立することを幕府に建議した。その啓文に始めて國學の語を用ゐたのである。なほ啓文の中に皇國之學

慶長 後陽成天皇の御代。(二二五六—二二七五)

挿繪 荷田春滿筆蹟。

閑庭露滋

東丸

置まゝにさしも拂はぬほとみへて露に露そふ蓬生の庭

風にのみこゝろおかれんあきの露誰かはほらふ淺茅生の庭
とはれぬは拂はぬ庭の淺茅生に置所得て露のみゆらん

荷田春滿 第四課註參照。

伏見稻荷 今、京都市伏見區深草町に鎮座す。官幣

大社。

享保 中御門天皇の御代。

徳川八代吉宗の治世。(二二七六—二二九六)

ともいひ、國家之學ともいつて、すべて同じ意義に用ゐてあるが、學校の名を國學校と出してあるのを見ると、國學といふ方が春滿の主として用ゐようとした言葉と認めてよろしい。

この意味での國學者は、萬治・寛文頃からおひ／＼にあらはれて、ちかくは明治時代に及んでゐる。僧契沖・荷田春滿・賀茂眞淵・本居宣長・平田篤胤等は、その最も傑出した人物である。

これ等の人々の忠實熱心な研究によつて、從來暗がりの中に放置せられてゐた古典が漸次に究明せられ、我が懐かしい同胞國民の面影をまのあたり見るが如く感ずることが出来るやうになつた。今まではせつかくあの貴重な古典をもつてゐながら、言語解釋の困難であるがために、祖先の

心胸に觸れることが出来なかつたが、これ等學者は、まづ言語を討究し、傳説を説明し、歌謠を解釋し、史籍物語等古典の全部に互つて啓蒙的研鑽に力めたので、我等後生がどのくらゐその餘澤に浴してゐるか計られない。我等は國學者の開いてくれた道に立つて、遠い祖先への面接に急ぐ時、しみじみ有難さを感じて、その功業を讚美しないではゐられない。

（國文學の諸相）

萬治 後西天皇の御代（二
三一―二二二）
寛文 靈元天皇の御代（二
三二―二二三）
平田篤胤 羽後國（秋田縣）
の人。國學四大人の一。
天保十三年（二五〇三）
歿、年六十八。

七 芳宜園大人の靈を祭る詞

村田春海

こゝに文化の五とせ九月八日平春海謹みて芳宜園の大人
の奥津城の御前に菊の初花一枝を手向け香の木一ひら
を焼きてうなねつきて申さく。

あはれ悲しきかも君は吾に十といひて一年の兄におは
するなるが今そのかみを思ひ出づるに君は方に盛りの齡
におはして吾はまだ童にてぞ侍りける常に縣居の庭に物
學びに行きかひたる時朝に參るとしては君の御佩の後へに
従ひ夕べに罷るとしては君の御袖のもとに縋りて相うるは
しみまつれること親子兄弟にも何か異ならむ書讀むとて
は君を師とも尊み歌作るとしては吾を兄弟のつらにぞ教へ
給ひける中頃にして君は仕への道に暇なくおはし吾は世

村田春海 四課註參照。
芳宜園大人 加藤千蔭。四
課註參照。

縣居 賀茂真淵。四課註參
照。

仕への道 千蔭が江戸町奉
行大同越前守のもとに與
力たりしをいふ。

のさがかにかづらひて自ら疎き方にも過ぎつるを君仕へ
を退き給ひて後は吾も同じ巷に移り住めば花を尋ぬとて
は吾道しるべをなし月を思ふとては君が舟に相乗り憂き
事も共に憂へ嬉しき節も共に喜びて世にありふるわざの
まめ事もあだ事も互に隔てなく心をかはせること今に二
十年その初を繰返し數ふればあひ友たること既に五十と
せにぞ餘りけるざるを今後れ奉りていつの世にか相見む
何れの時にか言問はむ常なきは人の身の習ひぞと知るも
これをいかでか歎かざらむかゝるを誰かはよく堪へむ。

あはれ悲しきかも文の林世々に衰へ言の葉の道日々に
下り行けるを賀茂の翁世に出でて今を棄てて古に復り青
雲の高級心しらひを求め倭文機の文あるみやびごとを貴
みいへれどくひぜを守り舟にきだつくる輩かれに泥みこ

くひぜを守り「宋人有二耕
田者一田中有株兔走觸

こにひかれて、猶怪しみとがむる類ひは多く、たまあひてよ
くうけひく人なむ稀なりしを、君ひとり心を起して、あまね
く諭し、廣くいざなひしより、近き人はまのあたり相うづな
ひ、遠き人は遙かに靡き來て、古ぶりの歌、世に盛になりた
るなり。

その自ら詠み出で給へる歌を見るに、古き調新しき姿、と
りどりに備らざるはなし。その古を寫せるは、藤原寧樂の御
世に及び、後のたくみに倣へるは、堀河鳥羽の御時に下らず。
心に思ふ事は口に盡くさざる事なく、目に觸るゝものは、言
葉に載せざることなむあらざりける。これを見て、高きも短
きも、めでたふとまざる人なし。又事好みの人は、その名を君
に知られては、身の面おこしと思ひて、世にも誇り、君のひと
歌を得ては、價なき寶にもかへじといひてぞ、深く喜びける。

然るを、今黄金の聲忽ち止みて、玉の響再び聞えずなりぬ
るは、わがどちの歎のみかは、大方の世の人の憂ともいひつ
べし。これをいかでか惜しまざらむ、かゝるを誰かは慕はざ
らむ。

あはれ悲しきかも、わがかく言あげするを、泉の下にもさ
やかにさこしめし、天翔りてもはるかに見そなはせとなむ
申す。

〔琴後集〕

千蔭みまかりて七日に當りける日、

菊の花一枝贈るとて

おもひさや山路のさくを手折りもて

袖になみだの淵なさむとは

(村田春海)

琴後集 十五卷。村田春海
の和歌・文章を集録した
るもの。

舟にきだつくる。「楚人有
涉江者。其劍自舟中
墮于水。遽刻其舟曰、
是吾劍所從墜也。舟止
從其所刻者、入水求
之。舟已行矣、而劍不
行。求劍若此、不亦惑
乎。」(呂氏春秋)

八川柳點

金子元臣

金子元臣 明治元年東京に生る。國文學者。歌人。宮内省御歌所寄人。

川柳點 もと、川柳が點を

つけたる句の意。

○川柳、柄井氏、名は正

通。江戸淺草阿部川町の

名主。寛政二年(二四五

〇)歿、年七十三。

川柳點は實に剃刀の如きか。觸るゝもの皆斷れ、近づくもの皆傷く。語句簡勁にして、直ちに人の肺腑に入り、諷刺骨に徹り、滑稽頤を解き、或は痛快に、或は輕妙に、或は突梯に奇怪に、千變萬化人をして應接に遑あらざらしむ。時に輕薄鄙俚の調なきにしもあらねど、要するに寸にして珍なるものなり。いで左にその二三を擧げて言ひ試みん。

あがるなと言はぬばかりの帳を出し

無筆者、年賀に来て、御慶帳の記名に困り、さらば來ぬ分にして下され。といひしこと、昔の笑話に見えたり。今は帳の代に名刺受を玄關に出す。是も上るなと言はぬばかりなり。

竹の子は盜まれてから番がつき

よく有ることなり。後の祭にもあれ、何にもあれ、番を附くるは附けざるに勝れり。聞きやうによりては、諷刺ともなり、訓戒ともなる。

おさへれば薄はなせばきりんとす

形容の妙を曲盡せり。蘇東坡が「餓蛟取、渴虎」と書けるを、いみじき手柄のやうに驚きし人若し此の句を見れば、何とかいはん。

本降になつて出てゆく雨やどり

道灌の「いそがずば濡れざらましを」の歌と一對の巧語、急ぎてもわろし、急がでもわろし。とにかく考へ物なり。

提燈が消えて座頭に手を引かれ

その矛盾がをかしきなり。塙檢校が「さてく、目あきは不自由な」といひしに似たり。

蘇東坡 名は軾。宋の文豪。

道灌 太田持資のこと。足

利末期の武將。初めて江

戸城を築く。文明十八年

(一一四六)歿、年五十

五。

いそがずば云々

いそがずばぬれざらまし

を旅人のあとより嗜める

野路のむらさめ。

塙檢校 名は保己。武藏

國の人。國學者。七歳に

して失明す。文政四年(二

四八一)歿、年七十六。

片假名に四角な文字は手を引かれ
漢文に捨假名反點のうるさく左右に附きたる様、譬へ得
て妙昔のヲコト點ならんには、四角な文字に灸をすゑとい
はばいふべし。

手紙には狸、臺には鯉を載せ

手紙を見て肝を潰し、臺を見て胸撫でおろすらんをかし
さよ。近來は中等教育を終へたる者の文章にも、狐を馬に乗
せたる類のこと多し。あながちにこの狸をのみ笑ひ難くや。

名物を食ふが無筆の旅日記

腹のふくる、旅日記かな。食ふより外に能なき人間を罵
倒し得て痛快。

泣くくも好い方を取る形見わけ

人情の弱點を穿ち過ぎて餘りに酷なる心地す。併し事實

なるをいかにせんかの赤穂の城渡しの際、お金配分に高割
を唱へし小野九太夫氏は、この露骨なるものか。

かくの如く、川柳點は、尋常茶飯の出來事を捉へて、能く滑
稽化するのみならず、又最も眞面目なるべき故事・傳説・史實
等を題目として、その縦横自在なる口吻を弄せり。

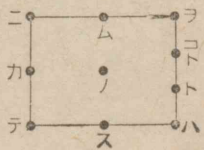
戸隱も神樂のあひだ髭をぬき

岩戸の細目に開くまでは、用のなき戸隱明神なるを思ふ
べし。鑷はさに髭ぬくひま人の所作を、神代に附會したる、働あり

御紀行拜見に能因は當惑し

なまじひに名歌を詠みて、苦勞をまうけたりしは能因な
り。天日に焦がして顔だけは黒めたれど、紀行までは手が届
かずやありけん、物にその沙汰なし。作者のつけ目は此處な
り。但し袋草紙に、一度においては實か。八十島の記を書けり。

ヲコト點



狐を馬に云々 見當違ひの
わけのわからぬこととい
ふ俗談。

小野九太夫 假名手本忠臣
蔵に出づ。鹽谷判官の老
臣にして貪婪怯懦なり。

戸隱 信濃國戸隱山なる戸
隱明神。手力雄命(タテ
カラテノミコト)を祀る。

能因 歌僧。俗名橋永徳。
攝津國古曾部に居り。一
條天皇頃の人。

袋草紙 四卷。藤原清輔の
著。歌學の書。
八十島 奥州の松島。

とあり。

忠盛の高名の場を犬がなめ

抱きとめたるは油坊主なるを思ふべし。わざと聯想の一

階を飛び越して、高名の場を嘗めたりといへる滑稽突梯、容易に及ぶべからず。

その暗さ隼太櫻に衝きあた



とは見たれども、天は實に暗し。いづこを射るべしと矢どころ定かならず」とあり。乃ち郎等隼太が左近の櫻に鼻衝きあててまご／＼する一場の喜劇を案出し來れるなり。作者はいかなる剽輕者ぞ。

忠盛 平清盛の父。仁平三年(一一八三)歿、年五十八。
○忠盛が油坊主を捕へたることは、平家物語卷六、祇園の女御の事」の條に見ゆ。

挿繪 油坊主(劇)

隼太 猪の隼太。頼政の郎等。

盛衰記 源平盛衰記。四十八卷。平家一門の興亡を記す。

○鶴の事、同書卷十六に出づ。

頼政 源氏。仲正の子。射を善くし、和歌に巧なり。

晩年剃髮し世に源三位入道と稱す。治承中以仁王

を奉じて兵を擧げ、敗れて治承四年(一一四〇)宇治平等院に自殺す。年七十七。

時致は鞭をかじつて息をつぎ

兄祐成が急を救はんとて、途に百姓の駄馬を奪ひて大磯に駆けつくるは、曾我物語中の出色の快譚なり。之を圖にして大根の鞭を添へたるは、畫工の氣轉なり。せきにせいたる息やすめに、その大根を嚙らせたるは、この作者の氣轉なり。

佐野の馬戸塚の阪で二度ころび

戸塚の阪は鎌倉入の一難處。元來乗り力なき源左が瘦馬、さぞや越えなづみしならん。さる

佐野 佐野源左衛門當世。諺曲「鉢の木」の主人公。
戸塚 相模國鎌倉郡。

を二度まで轉びたりと誇張したるに、大なる可笑しみを生ず。

芭蕉は飛び込み道風は飛びあがり

湊合の妙を見る。主題の蛙を言はで、突然に仕立てたる處に一種の面白みあるなり。

釣れますかなどと文王そばへ寄り

流石の聖人文王と奇傑太公望との邂逅も、話の口火を切るには極めて平凡ならざるを得ず。たゞ「などと」の語胸に一物ある趣を狀し來りて幾多の波瀾あるを覺ゆ。

道風 小野氏。書家。三蹟の一。貞元元年（一六三六）歿、年八十一。

文王 周の武王の父。

太公望 呂尚といふ、文王、武王を輔け、天下を一統せしむ。

九 世界の借家大將

井原西鶴

室町菱屋長左衛門殿借家に居申され候藤市と申す人、慥に千貫目御座候廣き世界に比びなき分限、我なりと自慢申せし。仔細は二間口の棚借にて千貫目持、都の沙汰になりしに烏丸通に三十八貫目の家質を取りしが、利銀積りておのづから流れ、始めて家持となり、是を悔みぬ。今までは借屋に居ての分限といはれしに、向後家有るからは、京の歴々の内藏の塵埃ぞかし。

此の藤市利發にして、一代の中にかく手前富貴になりぬ。第一人間堅固なるが身を過ぐる本なり。此の男家業の外に反故の帳を括り置きて見世を離れず。一日筆を握り、兩替の手代通れば、錢・小判の相場を附け置き、米問屋の賣買を聞合

井原西鶴 松壽軒・二萬堂等の別號あり。大阪の人。小説家。俳人。元祿六年（一三三三）歿、年五十二。

室町 京都市烏丸通の西の通。上京區の裏にあたる。

はせ、生薬屋、臭服屋の若い者に長崎の様子を尋ね、練綿、鹽酒は江戸棚の状日を見合はせ、毎日萬事を記し置けば、まぎらしことは此處にたづね、洛中の重寶となりける。



浪華西鶴畫 芳賀一品

不斷の身持、肌に單襦袢、大布子、綿三百目入れて、一つより外に着ることなし。袖覆輪といふ事、此の人取りはじめ、當世の風俗見よげに始末になりぬ。草足袋に雪踏を穿きて、終に大道を走りありきし事なし。一生の内に絹物としては、海松茶染にせし小袖一つ。若い時の無分別と、二十年も是を悔しく思ひぬ。紋所を定めず、土用干にも疊の上に直ぐには置かず、麻袴に鬼緋の肩衣、幾年か折目正しく取置かれける。

長崎 肥前國(長崎縣)長崎市。江戸時代唯一の開港場。
状日 書狀の到着する定期の日。

挿繪 西鶴畫像。芳賀一品筆。

海松茶 海松の如く黒みがかりし茶色にて、染めがへしのきかぬ色。
肩衣



町竝に出づる葬禮には、是非なく鳥部山に送りて、人より跡に歸りざまに、六波羅の野道にて丁稚もろとも當藥を引

いて、是を蔭干にして、腹藥なるぞと、只は通らず、蹟く處で燧石を拾ひて袂に入れてける。朝夕の煙を立つる世帯持は、よろづかやうに氣を附けずしてはあるべからず。

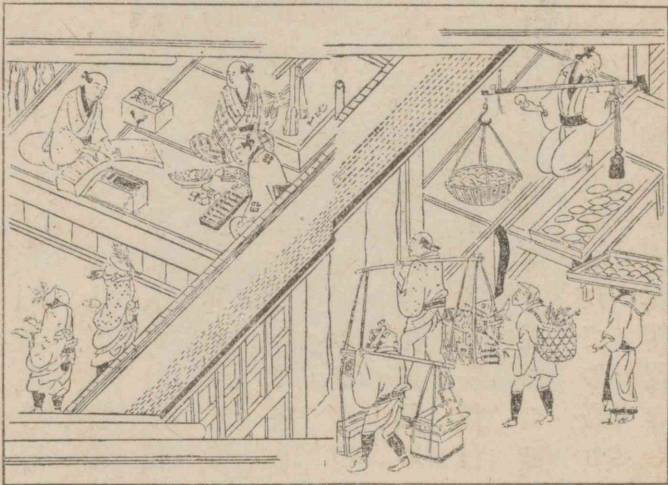
此の男、生まれついて吝きにあらず。萬事の取廻し人の鏡にもなりぬべき願、かほどの身代まで年とる宿に餅搗かず。忙しき時の人遣ひ、諸道具の取置もやかまして、是も利勤にて大佛の前へ誂へ、一貫目につき何程と極めける。十二月廿八日の曙、いそぎ荷ひつれ、藤屋見世にならべ、請取り給へ。といふ。餅は搗きたての好もしく春めきて見えける。旦那は聞かぬ顔して、十露盤置きしに、餅屋は時分柄にひまを惜しみ、幾度か断りて、才覺らしき若い者、扛秤の目りんと請取り

鳥部山 京都の東山にあリ。古來の墓地・火葬場。
六波羅 今の京都市下京區六波羅密寺・方廣寺の邊。
當藥(苦參)



大佛 京都方廣寺の大佛。

て返しぬ。一時ばかり過ぎて、今の餅屋請取つたか。」といへば、



一つは二文、二つは三文に値段を定め、何れか二つ取らぬ仁

「はや渡して歸りぬ。」この家に奉公する程にもなき者ぞ。温もりのさめぬを請取りし事よ。」と、又目を懸けしに、思の外減のたつこと、手代我を折つて、食ひもせぬ餅に口をあきける。

其の年明けて、夏になり、東寺あたりの里人、茄子の初生を目籠に入れて賣り來るを、七十五日の齡、これ樂しみの

挿繪 原本挿繪。

東寺 平安城の南端九條、今の京都市下京區にある名刹。眞言宗東寺派總本山。

はなし。藤市は一つを二文に買ひていへるは、今一文で、盛な

る時は大きなるがあり。」と心を附くる程のことあしからず。

屋敷の空地に柳、柊、榊、桃の木、花菖蒲、薺、苡仁など取りま

ぜて植ゑおきしは、一人あるむすめがためぞかし。葭垣に自

然と朝顔のはひかゝりしを、同じながめにははかなきもの

とて、刀豆に植ゑかへける。

何より我が子を見る程面白きはなし。娘大人しくなりて、

頓て嫁入屏風を拵へとらせけるに、洛中盡しを見たらば、見

ぬ處を歩きたがるべし。源氏伊勢物語は心のいたづらにな

りぬべき物なりと、多田の銀山出盛りし有様書かせける。此

の心からは、いろは歌を作りて誦ませ、女寺へも遣らずして

筆の道を教へ、ゑひもせず京のかしこ娘となしぬ。

親の世智なることを見習ひ、八歳より墨に袂をよごさず、

榊

苡仁



多田の銀山 攝津國（兵庫縣）河邊郡多田村。その銀山は廣さ六十六村に互り、豊臣・徳川時代、採掘盛なりき。いろは歌の終に「京」の字をそへるのは、手習本の常なりき。

節句の雛遊びをやめ、盆に踊らず、毎日、髪かしらも自ら梳きて丸髷に結び、身の取廻し人手にかゝらず、何れ女の子は遊ばすまじきものなり。

折節は正月七日の夜、近處の男子を藤市方へ、長者になるやうの指南を頼むとて遣はしける。座敷に燈かゞやかせ、娘を附け置き、露地の戸の鳴る時知らせと申し置きしに、此の娘しをらしくかしこまり、燈心を一筋にして物申の聲する時、元の如くにして勝手に入りける。三人の客座敷に着く時、臺所に搦鉢の音響き渡れば、客耳を悦ばせ、是を推して、皮鯨の吸物といへば、いや／＼始めてなれば、雑煮なるべし。といふ、又一人はよく考へて煮麴と落着きける。必ずいふ事にしてをかし。

藤市出でて三人に世渡りの大事を物語して聞かせける。

一人申ししは、今日の七草といふいはれはいかなる事ぞ。と尋ねける。あれは神代の始末はじめ、雑炊といふことを知らせ給ふ。又一人、掛鯛を六月まで荒神の前に置きけるは、と尋ぬ。あれは朝夕に肴を食はずに、是を見て食うた心地せよといふ事なり。又太箸をとる由來を問ひける。あれは穢れし時、白げて一膳にて一年中あるやうに、これも神代の二柱を表すなり。よく／＼萬事に氣を附け給へ。さて宵から今まで、各話し給へば、最早夜食の出づべき所なり。出さぬが長者になる心なり。最前の搦鉢の音は大福帳の上紙に引く糊を搦らした。といはれし。

上日本永代藏

七草 芹・なづな・こぎやう・はこべら・佛の座・すずな・すいしろ。

荒神 「三寶荒神」の略。かまどの神。

一〇 國姓爺

近松 門左衛門

別れ行く船路の末も知らぬ火の、筑紫は雲にかくるれど、
あとに擁護の神風や、千波萬波をおし切つて、時も差へず親
子の船、唐土の地にも着きにけり。

鄭芝龍一官は、故郷へ歸る唐錦、裝束ひきかへ、妻子に向ひ、
「我が本國といひながら、時移り代かはり、天下悉く李蹈天
が引きいれにて、韃靼夷の奴となり、昔の朋友一族とて、誰を
尋ねんやうもなく、司馬將軍吳三桂が生死のほども知れざ
れば、何を以て義兵の旗を擧げ、いづく一城にたて籠るべき。
然るに、某去んぬる天啓五年、此の國を立ち退き日本へ渡る
時、二歳になれる娘の子を乳母が袖に捨て置きしが、その子
が母は産み落して當座に死す。かくいふ父は、八重の汐路の

近松門左衛門 本名は福森
信盛、巢林子と號す。京
都の人。淨瑠璃作者。江
戸時代の代表的文豪。享
保九年（一三八四）歿、年
七十二。

親子 鄭芝龍夫婦とその子
國姓爺（コクセンヤ）。

鄭芝龍 明末の人。明朝の
遺臣。

李蹈天 明朝の將軍。後、
韃靼に内應して明帝を弑
す。

吳三桂 明朝の忠臣。司馬
大將軍。

天啓五年 明の熹宗の年
號。我が寛永二年（二二
八五）に當る。
娘 錦祥女といふ。甘輝の
妻。

中絶えて、いつ父母も知らぬ身が、育てば育つ草木の、雨露の
恵に長ずる如く、天地の父母の助けにや、成人して、今吳將軍



し、日本の漁船の吹き流されしと、頓智を以て人家に憩ひ追
ひ付くべし。これより先は、音に聞ゆる千里が竹とて、虎のす
む大藪なり。それを過ぐれば、潯陽の江、これ狸々の住むとこ

甘輝 明の將軍。一時は韃
靼に降りしも、後、間も
なく鄭芝龍に應ず。

挿繪 近松門左衛門畫像。

和藤内 鄭成功のこと。後
に「國姓爺」と稱す。

潯陽江 支那の江西省九江
府にあり。

る。風景聳ゆる高山は赤壁とて、昔東坡が配所ぞや。それよりは甘輝が在城獅子が城へは程もなし。その赤壁にて待ち揃へ、萬事を示し合はずべし。」

と、方角とてもしら雲の、日影を心おぼえにて、東西へこそ別れけれ。

教にまかせ和藤内、人家を求め忍ばんと、かひなくしく母を負ひ、たづきも知らぬ岩巖石、古木の根ざしたきつ波、飛び超え跳ねこえ、飛鳥のごとく急げども、未果しなき大明國、人里たえて廣々たる、千里が竹に迷ひ入る。和藤内、ほうと、我をぬかし、

「なう母ぢや人、この脚骨たもとに覚えあり。もう四五十里も來ませうが、人にも猿にもあふことか、行けば行くほど藪の中むう、合點あつたり、方角知らぬ日本人、唐の狐がなぶるよな。魅まさば

魅せ、宿なし旅の行きつき次第、小豆の飯いんの相伴とも。」

と、根笹大竹押し分け踏み分け、猶奥深くゆく先に、怪しや數萬の人の聲、攻鼓、攻太鼓、喇叭チャルメラ、高音をそらし、ひやうひやうとこそ聞えけれ。

「すは、われくを見咎めて、敵の取り巻く攻太鼓か。又は狐のなす業か。」

と、茫然たるその折節、空すさまじく風起り、砂いを穿ちどうどうどう、竹葉たけさつと巻き立て巻き立て、吹き折る竹は劔けんの如く、すさまじなんども愚なり。和藤内ちつとも臆せず。

「よめたり、よめたり。さては異國の虎狩な。あの鉦太鼓は列卒の者、爰は聞ゆる千里が原、虎嘯うげば風起る、猛獸の所爲と覺えたり。二十四孝の楊香は、孝行の徳によつて、自然と脱れし悪虎の難。その孝行には劣るとも、忠義に勇む我が勇力、唐

赤壁 支那の湖北省武昌府嘉魚縣にあり。
東坡 蘇氏。名は軾。支那の宋代の詩人。

チャルメラ ポルトガル語



虎嘯うげば云々 淮南子に「虎嘯う而谷風至、龍舉り而景雲屬し。」と。
楊香 晋の人。十四歳の時、徒手空拳にて虎を搏ちて父の厄を救へり。

に渡つて力はじめ、神力ますく、日本力、刃で向ふは大人氣なし。虎はおろか、象でも鬼でも一挫ぎ。」
と、尻引つからげ身繕ひ、母を圍うて立つたるは、西天の獅子王も恐れつべうぞ見えてける。

案に違はず吹く風と、共に荒れたる猛虎のかたち、藤根に頬を摺りつけ、摺りつけ、岩角に爪磨ぎ立てて、二人を目がけいがみかゝるを事ともせず、ゆん手になぐり、右手に受けもぢつてかゝれば、身をかはし、撓めばひらりと乗りうつり、上になり下になり、命くらべ、根くらべ、聲を力にえい／＼、虎の怒り毛怒り聲、山も崩るゝ如くなり。和藤内も大童、虎も半分毛をむしられ、兩方共に息つかれ、石上に突つ立てば、虎も岩間に小首を投げ、大息吐いたるその響、ふいごを吹くが如くなり。母藪蔭より走り出で、

西天 印度のこと。

「やあ／＼、和藤内、神國にうまれて神より受けたる身體、髮膚、畜類に出合ひ力だてして怪我するな。日本の地は離るとも、神は我が身に五十鈴川、大神宮の御祓、納受などかなからんや。」

と、肌の護符を渡さるれば、實に尤もと押しいたゞき、虎にさし向け差上ぐれば、神國神祕のその不思議、猛りに猛る勢も、忽ち尾をふせ耳をたれ、じりり／＼と四足を縮め、恐れわななき岩洞に隠れ入る。尾筒を擱んで跳ね返し、うち伏せ、うち伏せ、ひるむ處を乗つかゝり、足下にしつかとふまへしは、天の斑駒須佐之男命の神力、天照す神の威徳ぞあり難き。
かゝる處に列卒の者、群り來るその中に、大將と覺しき者大音聲、

「やあ／＼、うぬは何くの風來人、わが高名を妨ぐる。その虎

天の斑駒云々 須佐之男命が、天の斑駒を、生きながら皮を剥き、天照大神の齋服殿に投げ入れ給ひしこと、日本書紀に見ゆ。

は忝くも、主君右將軍李蹈天より、韃靼王へ獻上の爲狩り出したる虎なるぞ。はや／＼渡せ、異議に及ばば打ち殺さん。」

とわめきけり。李蹈天と聞くよりも、願ふ所と笑壺に入り、

「やあ、餓鬼も人數、しをらしいことほざいたり。身が生國は大日本、風來とは舌長し。さほど欲しがらる虎ならば、主君と頼む李蹈天とやら石花菜とやら、爰へつき出し詫言させいぢきに逢うて用もある。さもないうちには、いかなこと、ならぬならぬ。」

とねめつくる。

「やあ、物な言はせそ。うち取れ。」

と、一度に劔をばらりと抜く。心得たりと護符を虎の首にかけ、母の傍に引き据うれば、繋げる如くに働かず。おゝ心安し。」と太刀さしかざし、群る中へ割つて入り、八方無盡に割り立

李蹈天云々 李蹈天の首から「トコロテン」を逸想し、トコロテンの縁語で、「つき出し」といひたり。

てわりたて撫でまくる。

列卒の大將安大人、官人ひき具し立ち歸り、「おのれ老ぼれ餘さじ。」と一文字に切り懸る。猶も神明擁護の驗、神力虎に加つて、むつくと起きて身慄ひし、敵に向ひ齒を鳴し、猛りうなつてとび蒐る。「こは叶はじ。」と安大人、せこの者が差いたる劔、かり鋒、かず槍手にあたるを幸に、投げつけ、投げつけ、打ちかくる。虎は神力自在を得、劔を宙に引つくはへ、ひつくはへ、岩に投げ當て、微塵になす。刃の光、玉散る露、氷を碎くに異ならず。打物つくれば、官人ども色めき立つて逃げ惑ふ。後より和藤内、「どつこい遣らぬ。」と顯れ出で、安大人が素首を掴んで、差し上げ、くる／＼と振り廻し、「えいやつ。」と打ちつくれば、岩に熟柿を打つ如く、五體ひしげて失せにけり。

此の勢に官人ばら、後に戻れば、悪虎の口、先へ行けば和藤

内、仁王立ちに突つ立つたり。「あ、申し御勘忍、御免、御免。」と手を合はせ土に喰ひつき泣き居たり。和藤内虎の背を撫でて、

「うぬらが小國とて侮る日本人、虎さへこはがる日本の手並を覺えたか。我こそ音に聞えたる鄭芝龍一官が悴、九州平戸に成長せし和藤内とは我が事なり。先帝の妹宮梅檀皇女にめぐり逢ひ、三世の恩を報ぜん爲、父が故郷へ立ち歸り、國の亂を治むるなり。さあ、命をしくば身方に附け、いやといへば虎の餌食、いやか、おうか。」と、詰めかくる。

「なう、何のいやでござりましたよ。韃靼王に従ふも、李蹈天に従ふも、命が惜しさ。向後お前の御家來ども、お情頼み奉る。」と、地に鼻つけて畏る。

「お、出かした、でかした。さりながら、我が家來になるからは、日本流に月代剃つて元服させ、名も改めて召し使はん。」と、差添の小さ刀はづさせ、是も當座の早剃刀、母も手ん手に受け取つて、並ぶ頭の鉢の水、揉むやもまづに無理無體、片端剃るやらこぼつやら、糸鬚厚びん、剃刀次第瞬くひまに剃りしまひ、二櫛半のばらけ髪、頭は日本髷は韃靼、身は唐人。互に顔を見合はせて、頭ひやつく風引いて、くつさめくつさめ、村雨村雨」と、涙を流すぞ道理なる。

親子どつと打笑ひ、

「揃ひも揃うた供廻、名も日本に改めて、何左衛門、何兵衛、太郎次郎、十郎まで、面々が國處頭字に名のり、二行に立つてぼつ立てる。」

「承り候。」

平戸 肥前國（長崎縣）北松浦郡平戸町。

三世の恩 「主恩」といふに同じ。主従の縁は三世まで繋がる、といひ傳へたればなり。

ぼつ立てる 「おひ立てる」の訛り。

とお先手の手ふりの衆、ちやぐ忠左衛門、束蒲塞、右衛門、呂宋兵衛、東京兵衛、暹羅太郎、占城次郎、ちやるなん四郎、ほるなん五郎、うんすん六郎、すん吉郎、もうる左衛門、ぢやが太郎、兵衛さん、とめ八郎、いざりす兵衛、今參のお供先、あとに引馬、虎斑の駒母を助けて孝行の名を取り、口取り國を取る、譽は異國本朝に踏み跨げたる鞍、鐙、虎の背中に打ち乗つて威勢を千里に顯せり。

—國姓爺合戦—

二 百 蟲 譜

横 井 也 有

蝶の花に飛びかひたる、やさしき物の限りなるべし。それも啼く音を愛づるものならねば、籠に苦しむ身ならぬこそなほめでたけれ。さてこそ、莊周が夢もこのものにはたくしけめ。

蛙は古今の序に書かれてより、歌よみの部に思はれたるこそさいはひなれ。臙月夜の風静まりて、遠く聞ゆるはよし。古池に飛んで翁の目覺したれば、このものこと、更にも謗りがたし。

蟬は、たゞ五月晴に聞きそめたる程がよきなり。やゝ日ざかりに鳴きさかる頃は、人の汗しぼる心地す。されば初蝶とも初蛙ともいふことを聞かず、この者ばかり初蟬といはる

横井也有 名は時般。尼張藩の重臣。天明三年（一四四三）歿、年八十二。

籠に苦しむ 「もし鳴かば蝶々籠の苦をうけむ」宗因

莊周が夢も云々 莊子、齊物篇に「昔者莊周夢爲胡蝶、栩栩然胡蝶也。自喻適志與、不知周也。俄然覺、則蘧々然周也。不知周之夢爲胡蝶、與、胡蝶之夢爲周與。」とあり。古池に云々「古池や蛙とびこむ水の音」芭蕉

るこそ大いなる手柄なれ、やがて死ぬけしきは見えず」と、このものの上は翁の一句に盡きたりといふべし。

螢は比ふべきものもなく、景物の最上なるべし。水に飛びかひ草にすだく。五月の闇は、只このものの爲にやとまでぞ覺ゆる。しかるに、貧の學者にとられて油火の代りにせられたるは、このものの本意にはあらざるべし。歌に螢火とよませざるは、ことの外の不自由なり。俳諧にはその眞似すべからず。

茅蜩は、多きもやかましくならず。暑さは晝の梢に過ぎて、夕べは草に露おく頃ならむ。つくづくぼふしといふ蟬は、つくし戀しともいふなり。筑紫の人の旅に死して、このものになりたりと、世の諺にいへりけり。あはれは蜀魂の雲に叫ぶにも劣るべからず。

蜘蛛は巧に網を結んで、潜まつて物を害せむとす。もろこの昔には退隱の媒ともなりたれど、ひとへに奸賊の心ありていと憎し。古代、朝敵の初として、頼光をさへおびやかしたる、いと恐ろし。さはいへ、廢宅の荒れたる軒に蟬の羽などかけ捨てたるは、聊かあはれ添ふる折もあらむか。彼はかひがひしく巢作りてこそあれ、東海道にちりばひたる宿なし者をば、くもとはいかでいふやらむ。

蠶の生涯は世のために終り、火取蟲は誰がために身をこがすや。

蜉蝣ははかなきためしにひかれ、蓼くふ蟲は不物ずきの謗となれり。

同じ實の名によばれて、玉蟲はやさしく、こがねむしはいやし

やがて死ぬ云々「やがて死ぬけしきは見えず蟬の聲」(芭蕉)

貧の學者云々 昔の車胤の故事。昔書、車胤傳に「胤字武子、幼、恭勤博覽、貧、不常得油、夏月以練囊盛數十螢火、照讀書讀之。」

蜀魂 時鳥の異稱。蜀の望帝の魂、化して時鳥となれること「蜀王本紀」に見ゆ。

退隱の媒 金樓子に「楚國襄舍、初、隨、楚王、朝、宿未央宮、見蜘蛛大如、架、四面、網、有、蟲觸之而死。舍乃歎曰、吾生亦如、此耳、仕宦者人之羅網也、豈可、淹、歲、於是、挂、冠而退。時人謂之爲蜘蛛之隱。」

頼光 源滿仲の子。圓融天皇以來五天皇に歴任し、勇武當時に冠たり。治安元年(一六八)歿す。

土蜘蛛の頼光を脅かしたる事は土蜘蛛草紙、太平記の劍卷等に見ゆ。

蟻は、明暮に忙しく、世の營に隙なき人には似たり東西に聚散し、餌を求めてやまず。いつか槐安の都をのがれて、その身の安き事を得む。さるもたより悪しきかたに穴を營みて、千丈の堤を崩すべからず。

蠅は、歐陽氏に憎まれ、紙魚は長嘯子にあはれまる。狗の齒に噛まる、蚤はたま／＼にして、猿の手にさぐらる、虱は逃る、こと難かるべし。

蝸牛は、たゞ水にあるべきものの、いかで草葉に遊ぶらむ。家持ちたれども、行くさき／＼を負ひ歩くは、水雲の安きにも似ず。

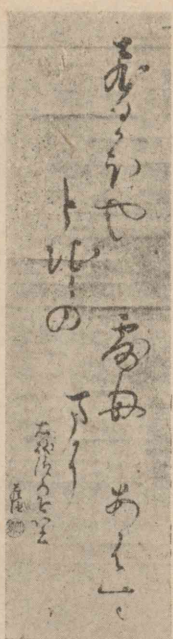
蛇・蚯蚓の足なくともあるべくば、蜈蚣をさむしの數多きは不用の事なり。

蝻螂の瘦せたるも、斧を持ちたる誇より、その心いかつな

り。人の上にもこの類はあるべし。

蟹の歩みに譬ふべきものこそなければ、たゞ原吉原を駕に乗りて富士を眺めゆく人には似たり。

促織・鈴蟲・響蟲は、その音の似たるを以て名によばる。松蟲のその木にもよらで、いかでかく名を附けたるならむ。毛生ひむくつけき蟲にも同じ名ありて、松を枯し、人に疎まる。一



つ在處に二人の八

兵衛ありて、一人は後生をねがひ、一人

は殺生を事とす。これ松蟲の類なるべし。きり／＼すのつづり刺せとは、人のために夜寒を教へ、藻に棲む蟲は、われからと、たゞ身の上をなげくらむを、蓑蟲のち、よと呼ぶは、母をば慕はで、など父をのみ戀ふらむとあ

槐安の都 書言故事に「異開集曰、淳于芬醉夢入大槐安國、見玉王。王曰、南柯郡屈レ卿爲レ守。居凡二十載、使者送出、穴遂寤。尋、古槐下蟻穴、洞然明。朝、乃槐安國。又一穴直上、南柯、即南柯郡也。」

千丈の堤 韓非子に「千丈之隄、以蠅蟻之穴潰。」

歐陽氏 名は修。支那宋代の文人。「憎蒼蠅」賦あり。古文眞寶後集に收む。

長嘯子 木下勝俊。若狭小濱の城主。後、封を失ひ隠棲して和歌をよくす。慶安三年歿、年八十一。

「憐紙魚」詞あり。「扶桑拾葉集」に收む。

斧を持ちたる詩 文選に「欲以蝻螂之斧、禦車之陸。」

原 靜岡縣駿東郡原。古の浮島が原。吉原 同縣富士郡吉原。

挿繪 横井也。有筆蹟。ひるがほやどちらの露もまにあはず。右磯清水を以書。蘿隱

つづり刺せ 「秋風に綻びぬらし藤袴つづりさせてふきり／＼すなく」(古今集、在原棟梁) われから「あまの刈る藻にすむ蟲のわれからと音をこそなかも世をば怨みじ」(古今集、藤原直子)

やし。

蚊は憎むべきかぎりながら、さすが卯月の頃、端居めづらしき夕べ、始めてほのかに聞きたる、又は長月の頃、力なく残りたるは、寂しきかたもあり、蚊、囁つりたる家のさま、蚊やり焚く里のけぶりなど、かつは風雅の道具ともなれり。藪蚊は殊にはげしきを、かの七賢の夜咄には、いかに團扇の隙なかりけむ。

—(鶉衣)—

七賢 晉の管康・阮籍・山濤・向秀・劉伶・阮咸・王戎は竹林の遊をなせり。
鶉衣 十四卷。横井有也の俳文集。

三 芭蕉と蕪村

松尾 芭蕉

春なれや名もなき山の朝がすみ
ほろ／＼と山吹散るか瀧の音
あけぼのや白魚しろきこと一寸
五月雨や色紙へぎたる壁の跡
朝露によごれて涼し瓜の泥
數ならぬ身とな思ひそ玉まつり
芭蕉野分して鹽に雨を聞く夜かな
菊の香や奈良には古き佛達

松尾芭蕉 名は宗房。伊賀國の人。初め藤堂侯に仕へ、侯の歿後、辭して京に出で、更に江戸に住み常に各地に旅す。正風の祖。その門人、十哲を始め、頗る多し。元禄七年(二三五四)歿、年五十一。

秋深き隣は何をする人ぞ

旅人と我が名よばれん初しぐれ

海くれて鴨の聲ほのかに白し

いざ子供走りありかむ玉霰

谷口蕪村

春の海終日のたりのたりかな

瀧口に燈を呼ぶ聲や春の雨

方百里雨雲よせぬ牡丹かな

牡丹切つて氣のおとろへし夕かな

谷口蕪村 名は寅。攝津國の人。芭蕉の歿後、俳調次第に卑俗に墮したるを慨し、新風を起し復古を唱へ、天明調を確立す。天明三年(一四四五)歿、年六十八。

さみだれや大河を前に家二軒

篝たく矢數の空を時鳥

路たえて香にせまり咲く茨かな

しのゝめや鶉をのがれたる魚淺し

四五人に月落ちかゝる踊かな

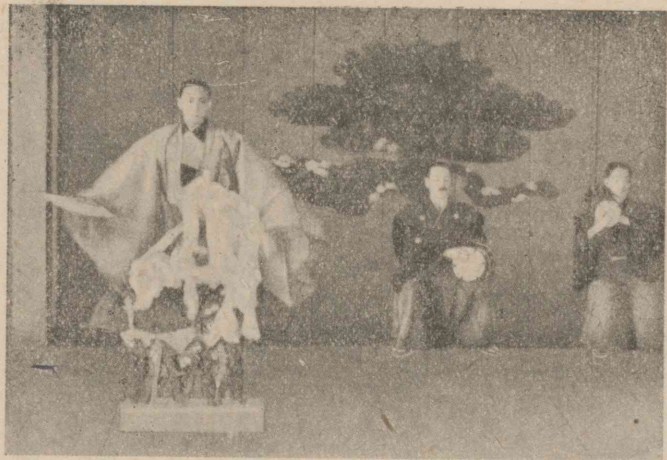
手燭してよき蒲團出す夜寒かな

しぐるゝや長田の館の風呂時分

息杖に石の火を見る枯野かな

一三 謠曲と狂言

佐成謙太郎



謠曲及び狂言の演ぜられる舞臺は、鏡板に一本の老松を描いた外、何の背景もない簡素なものであつて、この舞臺に登場する俳優は、謠曲の方ではシテ、ワキ、ツレと言ひ、狂言の方ではオモアドと稱して、兩方とも一曲の登場人物は僅か二三人に過ぎない。舞臺が簡素で、登場人物が少數であるから、勢ひその脚色は千篇一律に陥り易いが、

佐成謙太郎 明治二十三年
滋賀縣に生る。國文學者。
女子學習院教授。
シテ「爲手」の意。能一番
の主人公。
ワキ「脇」の意。シテの相
手役。
ツレ「連」の意。シテ又は
ワキの從者。
オモ 能狂言のシテ。
アド 能狂言のワキ。

挿繪 舞臺面。鉢の木。

他面に於て甚だ象徴的、暗示的に出來てゐて、その舞臺効果を收めてゐるのである。殊に謠曲では、笛、大鼓、小鼓、太鼓の囃子方を伴なつて音樂的要素を具へ、その斷續する韻律が簡素な舞臺と相俟つて暗示的效果を助成して居り、なほこの外に地謠の同吟があつて、登場人物の科白を補ひ、觀衆の理解を助けてゐるのである。謠曲と狂言とは同じ舞臺で演ぜられるのであるが、兩者の作意は全く別箇の立場にあつて、互に相對するやうになつてゐる。謠曲の觀衆に訴へるところは、尙古的な理想の主張であり、狂言の見物に示すところは、矛盾した現實の暴露である。

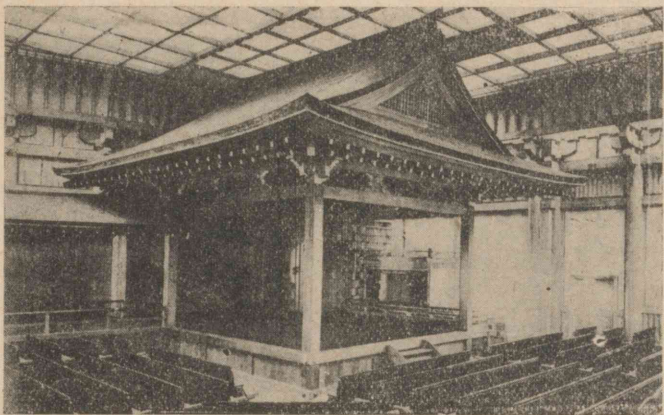
謠曲の第一に主張するところは、皇室の尊嚴と國土の讚美とである。當時は足利將軍が專横を極めた時代であり、觀衆の大部分は武士であつたにも拘らず、將軍を讚美し、幕府

を謳歌した語句は、謠曲數百番の全部を通じて一字も見出し得ないのである。かうして、謠曲は「天の羽衣まれにきて、撫づとも盡きぬ」君が代を祝ひ、關の戸さゝぬ、天が下を喜んだのであるが、狂言はこれに反して、自利我慾の人情世相を描き出さうとしたから、その祝言物も、多くは社參する平民などが自身に福德を授からうとし、他のもののためにする場合にも、直接の主人や領主などのために計るだけで、國家を眼目としたものは見當らないのである。併し、國家を眼目にしてゐないと言ふだけで、勿論反國家的のものもない。たゞ、主人を愚弄してゐるものは少なからずある。狂言の大名は大抵は無智で、その家來に翻弄されてゐるのである。

思ふに、室町武士の望むところは、平安貴族が持つてゐたやうな文學や藝術に關する知識や趣味であつた。この故に、

天の羽衣云々 謠曲「羽衣」の中の句。
關の戸云々 謠曲「難波」の中の句。

謠曲作者はあらゆる先進文藝の粹を集めることに腐心し、



文學技藝の達人を無上に尊敬して、たとひ如何に現世で罪深かつた女性でも、文學に達したものは必ず佛菩薩となつてゐる。まして男性の文學者を崇敬したことは異常なもので、在原業平の如き歌聖は、衆生濟度の姿を顯したものととして、その詠歌を受けると非情の草木も佛果の縁を得ると説いてゐるのである。かほどまでに文藝を尊敬する時は、勢ひ殺伐な武事を嫌厭するやうになる。源平の勇將は實に室町武士

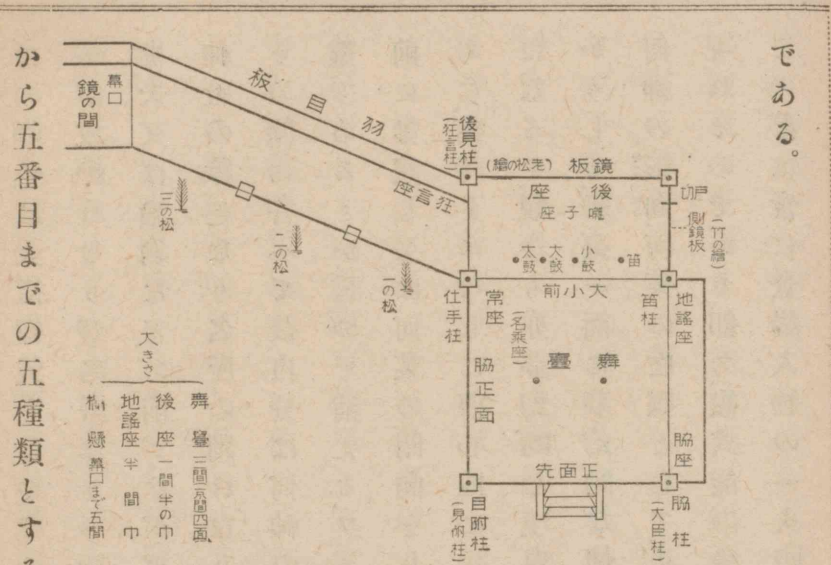
挿繪 實生流能樂堂。

にとつては尊敬すべき先輩であるにも拘らず、戦争で花々しく討死した此等の勇將を、謡曲作者は悉く修羅道に陥れて苦しませてゐるのもこれがためであらう。併し、狂言はこれに反して、題材を世話巷説に取つて、古典に據らないばかりでなく、或は文字穿鑿の愚かしさを嘲り、或は家系を重んずる貴族かぶれを冷笑してゐる。又狂言作者の説に従へば、力の強い武士は何處までも幸福なものであつて、朝比奈の如きは、娑婆で力が強かつたために、地獄へ行つても閻魔王を負してゐるのである。

謡曲は社會的秩序を重んじて愈、これを高めようとしてゐるが、狂言は實社會の裏面を描いて社會の缺陷を示すのであるから、狂言に現れる人物は、大名よりも家來の方が賢く山伏よりも百姓の方が偉く、夫よりも妻の方が力強いのである。

朝比奈 朝比奈三郎義秀。和田義盛の三男。勇武絶倫、建保元年、父に従つて北條氏を除かんとし、敗れて安房に走る。

である。



謡曲作者は理想派であり、狂言作者は自然派である。理想は高い望であり、あこがれは夢のやうな心持である。この故に、理想派の謡曲が舞臺効果を擧げるためには、出来るだけその演出を幽玄にし、その氣分を夢幻的に導くことが大切でもあつたのである。謡曲の種類を大別して、脇能

挿繪 能樂の舞臺面。

脇能 能のその日の番組の最初に演ずるもの。その次が二番目、以下、五番目までを一組とするなり。

目の脚色は、大抵複式となつてゐる。ワキの勅使とか僧侶とかが或神社なり或名所なりへ行くと、その地の住人として樵夫又は漁翁などの前ジテが來會はす。ワキがこの里人に神社の縁起なり名所の謂れなりを尋ねると、里人は委しくその間に答へて後、自分は何神の化現であるとか、何某の亡靈であるとか言つて消える。ワキは奇特の思をして、その神前に參籠し、又は何某の回向をして、一夜をその處に過すうちに、何時とはなしに夢心地に誘はれて行く。ワキが夢心地になると、觀衆も亦夢幻的な境界に誘はれて行くのである。かうして、舞臺一面に夢幻的な情趣の漂つた處へ、後ジテが何神の影向、何某の亡靈として、正體正身の姿でワキの夢に現れるのである。即ち、複式能の後段は、劇中夢の場であるが、この夢は啻に登場人物の一人が見てゐる夢ではなく、觀衆

すべてがワキと共に見てゐる夢である。後ジテの演出を見て觀衆の受取る心持は、舞臺に登場した俳優の技藝ではなく、觀客各自の夢幻界に現れて來る神佛英雄佳人そのものなのである。この効果は他の戯曲に見られない謡曲の一大特色であつて、これこそ能樂が今日に至るまで永い生命を保つてゐる所以の一つであらう。

このやうに、後ジテを舞臺の人として見ず、觀衆の夢幻の世界、若しくは主觀の世界に立たせるためには、ワキの技藝力と觀衆の想像力とに俟つことが多いのであるが、この夢幻の世界を美化すると否とは、又後ジテの技藝の巧拙によつて分れるのであつて、十分な効果を奏するには、後ジテの演出が飽くまで幽玄であることを必要とするのである。華麗な詞章を謠ふのに鈍重な聲調を以てし、優雅な舞や壯烈

な働きなどを演ずるのに單純な所作を以てするのは、即ちこの幽玄な表現を期待するために外ならないのである。

狂言作者は自然派で、社會の實相の一面を捉へて、憚りなくその缺陷を剔出する。併し、このやうな目的に従事する文藝作家は、常に讀者又は觀衆との正面衝突を避け、讀者や觀衆にとつては他人事であるかのやうに脚色して、心あるものには諷刺を感ぜしめ、心足らぬものには滑稽と笑はしめる方策をとる。狂言は即ちこの方策をとつて、喜劇諷刺劇の形を具へてゐるのである。狂言に出て來る主人公を大別すれば、精神的又は肉體的に缺陷のあるものと、社會的又は個人的に優越してゐるものと、二種類になる。そして主人公が普通人よりも劣つてゐる時は、觀衆はその主人公に對して一種優越の感を抱き、その距りから滑稽味を覺える。「末廣

といふ語意を知らない爲に、都の商人に欺かれて、傘を買つて歸る「末廣がり」や、婿入の禮式を知らないで、人に愚弄された言葉をもつた式場で用ゐる「吟じ婿」は、最初から末廣の語意なり婿入の禮式なりを知つてゐる觀衆には、笑止千萬に感じられるのである。心ある者は、この主人公と五十歩百歩の距りに過ぎない我が愚かしさに反省するであらうし、心足らぬ者は、只その滑稽に笑ひこけるであらう。作中の主人公が普通人よりも社會的地位の勝れてゐる者であると、總べての點に於て普通人より勝つてゐるやうに想像され易いが、これが實際を見ると、案外甚しい缺陷を持つてゐて、滑稽な失策を演ずる者が少なくない。かう言ふ失態を見せつけられた時には、觀者は豫想の裏切られた皮肉を感じるのである。平民に愚弄される多くの大名や、百姓に翻弄され

る山伏などがそれであつて、大名と言へば地位が高く、知識も深い筈であり、山伏と言へば效驗のあらたかであるべき筈であるのに、實は凡物と同様な缺陷を持つてゐるから、平凡人から愚弄されるのである。だから、その取材人物が特殊なものであるだけ、一層その諷刺の意味が濃厚に現れるのである。

形式的な方面を見ても、謠曲は典雅な平安朝時代の言葉と簡潔な鎌倉幕府時代の言葉とを交へたものであるが、狂言は通俗な室町幕府時代の言葉だけを用ゐてゐる。謠曲の人物は、急ぎ候ほどに「目的地へ着くのであるが、狂言の人物は、多くは「そろりそろりと参るのである。そして、その結末が、謠曲の方は、修羅道、地獄道に苦しんでゐたものが、ワキ僧の回向によつてめでたく成佛するのであり、狂言の方は、始め

詭計に成功してゐたものが、忽ち破綻に終つて、やるまいぞ、やるまいぞ。」と追ひ込められるのである。即ち理想派の謠曲は悲劇に始つて喜劇に終り、自然派の狂言は喜劇に始つて悲劇に終るのである。

室町人士の要求に應じて始めて大成した邦劇の謠曲と狂言とは、時代相の明暗二面、即ち相反した各半面を代表して、一は夢幻的な憧憬の世界を仰ぎ、他は醜惡な現實の世界に直面し、讚美と反省と、希望と冷笑と、兩々相對し、彼此互に對照して、然も同じ簡素な舞臺に交互に演ぜられて、今に各、その長處を發揮しつゝ、傳へられて來てゐるのである。

四 羽衣

ワキ 漁夫白龍
 ワキツレ 同行漁夫
 シテ 天女

ワキ一聲「風早の三保の浦曲を漕ぐ船の浦人さわぐ浪路かな。
 ワキ、サシ語 「これは三保の松原に白龍と申す漁夫にて候。
 ワキツレ語「萬里の好山に雲乍ち起り、一樓の明月に雨初めて晴
 れたり。げにのどかなる時しもや、春のけしき松原の、浪立ち
 つゞく朝霞、月ものこりの天の原及びなき身の眺めにも、心
 空なるけしきかな。歌「忘れめや、山路をわけてきよ見瀉、はる
 かに三保の松原に、たちつれいざや通はん。風向ふ雲のうき
 浪たつと見て、釣せで人や歸らん。待てしばし、春ならば、吹

風早の云々 萬葉集に「風
 早の三保の浦曲を漕ぐ舟
 の舟人さわぐ浪立つらし
 も」
 三保の松原 駿河國有度
 郡。
 萬里の好山云々 詩人玉屑
 に「千里好山雲乍起、一
 樓明月雨初晴」
 及びなき身云々 續拾遺集
 に「いかならばなき世と
 か思ふ見るからに心空な
 る天の羽衣」
 忘れめや云々 續古今集に
 「忘れずよ清見が關の浪間
 より霞みて見えし三保の
 松原」

くものどけき朝風の松は常磐の聲ぞかし。浪は音なき朝な
 ぎに、釣人おほき小舟かな。ワキ詞「われ三保の松原にあがり、浦
 のけしきをながむる所に、虚空に花ふり、音楽きこえ、靈香四
 方に薰ず。これたゞごとと思はぬ所に、これなる松に、うつく
 しき衣かゝれり。よりて見れば、色香妙にして常の衣にあら
 ず。いかさま取りて歸り、古き人にも見せ、家の寶となさばや
 と存じ候。

シテ詞「なう、その衣はこなたのにて候。何しに召され候ふぞ。
 ワキ詞「これは拾ひたる衣にて候ふほどに、取りて歸り候ふよ。
 シテ詞「それは天人の羽衣とて、たやすく人間に與ふべき物に
 あらず。元の如くにおき給へ。ワキ詞「そもこの衣の御主とは、さ
 ては天人にてましますかや。さもあらば、末世の奇特にとゞ
 めおき、國の寶となすべきなり。衣を返す事あるまじ。シテ詞「悲

風向ふ云々 冷泉爲相の歌
 に「風向ふ雲の浮浪立つ
 と見て釣せぬ先に歸る舟
 人」

しやな、羽衣なくては飛行のみちも絶え、天上に還らんことも叶ふまじ。さりとは返したび給へ。ワキ謡この御詞をきくよりも、いよ／＼白龍力を得、詞もとよりこの身は心なき、天の羽衣取り隠し、謡叶ふまじとて立ちのけば、シテ謡今はさながら天人も、羽なき鳥の如くにて、あがらんとすれば衣なし。ワキ謡地にまた住めば下界なり、シテ謡とやあらん、かくやあらんとかなしめど、ワキ謡白龍衣を返さねば、シテ謡力およばず、ワキ謡せんかたも、地謡涙の露の玉鬢、かざしの花もしを／＼と、天人の五衰も、目の前に見えてあさましや。

シテ謡天の原、ふりさけ見れば霞立つ、雲路まどひてゆくへしらずも。地謡すみ馴れし、空にいつしかゆく雲の、うらやましきけしきかな。迦陵頻伽のなれ／＼し、聲今さらにわづかなる、雁がねの歸りゆく、天路を聞けばなつかしや。千鳥鷗の

天人の五衰 天人が命終の時、五つの死滅の異相を生ずるをいふ。その中に頭上華萎の相あり。

天の原の歌 丹後風土記に出づ。

迦陵頻伽 梵語、妙聲鳥と譯す。

沖つ浪、行くか歸るか春風の空に吹くまでなつかしや。

ワキ詞いかに申し候。御姿を見たてまつれば、あまりに御痛はしく候ふほどに、衣を返し申さうずるにて候。シテ詞あらうれしや、こなたへ賜はり候へ。ワキ詞しばらく承り及びたる天人の舞樂、たゞ今こゝにて奏し給はば、衣を返し申すべし。

シテ謡うれしや、さては天上に還らん事を得たり。このよろこびに、とてもさらば、人間の御遊のかたみの舞、月宮を廻らす舞曲あり。唯今こゝにて奏しつゝ、世のうき人に傳ふべし。さりながら、衣なくては叶ふまじ。さりとはまづ返し給へ。

ワキ詞いや、この衣を返しなば、舞曲をなさでその儘に、天にや上り給ふべき。シテ詞いや、疑は人間にあり。天に偽なきものを。ワキ謡あらはづかしや、さらばとて、羽衣を返し與ふれば、シテ謡少女は衣を著しつゝ、霓裳羽衣の曲をなし、ワキ謡天の羽衣風

とてもさらば とてもかく
てもの意。
月宮 月世界の宮殿。



に和し、シテ謠「雨にうるほふ花の袖、ワキ謠」一曲をかなで、シテ謠「舞ふとかや。地謠」東遊の駿河舞、この時や始なるらん。

クリ地謠「それ久かたのあめといつは、二神出世のいにしへ、十方世界をさだめしに、空はかぎりも無ければとて、久かたの空とは名附けたり。シテ、サシ謠」然るに月宮殿のありさま、玉斧の修理とこしなへにして、
春霞 たなびきにけり久方の月の柱の花や咲くげに花かつら色めくは春のしるしかや面白や天ならでども妙なり天つ風雲の通ひ際吹きとちよ少女の姿暫し留まりてこの松原の春の色を三保が崎月清見湯富士の雲いづれや春のあけほの類ひなふも松風もどかなる浦の有様その上天地は何を隔てん玉垣の外神の

ま少女奉仕を定め役をなす。シテ謠「我も數ある天少女、地謠」月のかつらの身をわけて、かりに東の駿河舞、世につたへたる曲とかや。ケヒ「春霞たなびきにけり久かたの月のかつらも

二神 伊弉諾・伊弉册の二尊。
十方 東西南北乾坤巽艮上下。

挿繪 觀世流謠本。

春霞云々 後撰集「春霞たなびきにけり久方の月の柱も花や咲くらむ」

花や咲くげに花かつら色めくは、春のしるしかや。おもしろや天ならで、こゝも妙なり天津風、雲の通ひぢ吹きとぢよ。少女の姿しばしとゞまりて、この松原の春のいろを三保がさき、月清みがた富士の雪、いづれや春の曙、たぐひ浪も、松風も、のどかなる浦のありさま。その上天地は、何を隔てん玉垣の内外の神の御するゑにて、月も曇らぬ日の本や。シテ謠「君が代は、天の羽衣まれにきて、地謠」撫づとも盡きぬ巖ぞと、聞くも妙なり東歌。聲そへてかずくの笙・笛・琴・篳篥、孤雲の外に充ち満ちて、落日の紅は、蘇命路の山をうつして、緑は浪に浮島が、はらふ嵐に花ふりて、げに雪をめぐらす白雲の袖ぞ妙なる。
シテ謠「南無歸命月天子、本地大勢至。地謠」東遊の舞の曲、シテ、ワキ謠「或は天つみ空の緑の衣、地謠」又は春立つ霞の衣、シテ謠「色香も妙なり少女の裳裾、地謠」左右左さいう颯々の花をかざしの

天津風云々 古今集「天津風雲のかよひち吹きとぢよ少女の姿しばしとゞまりむ」

君が代は云々 拾遺集「君が代は天の羽衣まれにきて撫づともつきぬ巖なるらむ」

蘇命路の山 須彌山ともいふ。佛經に出づ。

天の羽袖、靡くもかへすも舞の袖。キリ地蓋東遊のかず／＼に、その名も月の宮人は、三五夜中のそらにまた満願真如の影となり、御願圓滿、國土成就、七寶充滿の寶をふらし、國土にこれをほどこし給ふ。さる程に時うつつて、天の羽衣浦風に、たなびきたなびく三保の松原、浮島が雲の、あしたか山や富士の高嶺、かすかになりて、天つみ空の霞にまぎれて失せにけり。

〔觀世謠本〕

五 入間川

大名 駈斗目・素襖・大臣烏帽子・小刀。

太郎冠者 半袴・上下、太刀持つ。

入間 長袴・小刀。

大名「八幡大名なが／＼在京致すところに、訴訟思ひのまゝに相叶ひ、このやうな嬉しいことはない。まづ太郎冠者を呼出し、喜ばせうと存ずる。やい／＼太郎冠者あるかやい。」冠者はあ。大名「居たか。」冠者「お前に居ります。」大名「早かつた。汝を呼出すこと、別のことではないなが／＼在京するところに、訴訟思ひのまゝに相叶ひ、追つ付け國許へ下る。何とめでたいことではないか。」冠者「これは御意の通り、おめでたいことござる。大名、その儀ならば、追つ付け下らう。供をせい。」冠者「畏つ

てござる。大名(道行)やいゝ、汝は精を出して、よう奉公したほ
 どに、國許へ行たらば、馬に乗せうぞ。冠者、それは忝うござる。
 大名、さりながら、馬に乗るまでは牛に乗れといふ、まづ牛に
 乗せうぞ。冠者、それは兎も角もでござる。大名、これは戲言(ぎげん)馬
 に乗せうぞ。冠者、いよゝゝ忝うござります。大名、やい、太郎冠
 者、向うに眞白に見ゆるは富士山であらうなあ。冠者、成程富
 士山でござる。大名、二國に隠れもない名山ぢやと云ふが、見
 事な山ぢやなあ。冠者、左様でござります。(大名道行)さあ來い、さ
 あ來い。はや駿河の國へ來た。急げゝ。やあ、これは渺々とし
 た野へ出た。定めてこれが武藏野であらう。さてもゝ、廣い
 ことぢやなあ。冠者、廣い野でござります。大名、もはや國許へ
 も程近い。さあ來い、さあ來い。冠者、参ります。大名、やあ、これに
 大きな川がある。これは何といふ川ぢや。上りにもあつた川

馬に乗せうぞ 身分の無き
 ものは馬に乗ることのな
 らざるが當時の制なり。

三國 日本・唐・天竺。

か覺えぬ。冠者、されば覺えませぬ。大名、誰ぞ在所の者が見え
 たら尋ねたい。

入間(入間)何某、これは入間に隠れもない何某でござる。川向うへ用
 所(所用)あつて参る。大名、やあ、向うに人が見ゆる。尋ねて見よう。や
 いやいや、向うな者に物が問ひたいやい。入間、これは如何な事。
 この邊で、某にあの如く云ふ者は覺えぬ。返事の致し様があ
 る。やいゝ、物が問ひたいと云ふは、こちらの事か。何事ぢやや
 い。大名、これは憎い奴の。太郎冠者や太刀をおこせい。冠者、こ
 れは何となされます。大名、いや、某に今の様な慮外をぬかす。
 打切つてくれう。冠者、いや、左様でござらぬ。お國許でこそこ
 なたを見知りませう。こゝもとでは、見知らぬによつての事
 でござる。言葉を直してお尋ねなされませ。大名、それもさう
 ぢや。言葉を直さう。まうしゝ、向うなお方に物が問ひたう

慮外 無禮。

ござる。入間これは如何なこと、言葉を直した。まうしく、物が尋ねたいと仰せらるゝは、此方のこととござるか。何事とござるぞ。大名さてもしく可笑しいことかな。言葉を直した。川の名を問はう。まうしく、この川は何と申す川でござる。

入間これは入間川と申します。大名やい太郎冠者、入間川ぢやと云ふわ。冠者さやうでござる。

大名渡り瀬を問はう。まうしく、この川は何處もとを渡ります。

又こなたの名は何と申す。入間身ごもは、入間の何某でござる。この川は、これより上を渡ります。此處は深うござる。大名「やいしく、何某ぢやと云ふは、最前腹を立てたが道理ぢや。渡



挿繪 入間川。

り瀬は上を渡ると云ふ。さあしく知れた。渡れ渡れ。冠者いやいや其處は深いと申します。御無用でござる。大名いやしく身どもが合點ぢや。此處を渡れ渡れ。入間まうしく、其處は深うござる。御無用ぢや。止めさせられ、止めさせられ。大名さあさあ太郎冠者、渡れ渡れ。これは如何なこと。南無三寶、やれ、流れるは流れるは。入間はあ、これは深いと申すに、笑止な。大名おのれ憎い奴の、やることではないぞ。成敗する。入間これは何とめさるぞ。大名最前に川の名を問へば入間川といふ。渡り瀬はと問へば、此處は深い、上へ廻れといふ。總じて入間言葉には逆語さかひことばを使ふにより、此處を深いと云ふは浅いと云ふこと、上へ廻れといふは此處を渡れと云ふことと心得て渡つたれば、諸侍に欲しうもない水をくれたほどに、成敗するぞ。入間扱はこなたには、入間言葉をよく御存じでお遣ひ

南無三寶 驚きの甚しきにいふ詞。どうぞ三寶よ守護し給への意。

入間言葉 入間やうともいふ。反對に言ふと意を逆にいふとの二様あり。

なさるゝな。大名、なか／＼知つて居る。入間、何と成敗せうと仰せらるゝは定でござるか。大名、なか／＼定ぢや。入間、とてものことに御誓言で承りませう。大名、何がさて、弓矢八幡成敗いたす。入間、あら心安や、ざつと濟んだ。大名、これは如何なこと。成敗せうと云へば、あら心安や、ざつと濟んだと云ふは、どうしたことぢや。入間、さればそのことぢや。こなたは入間言葉を御存じでお遣ひなさるゝによつて、成敗せうと仰せらるゝは、弓矢八幡成敗せまいと云ふことぢやと思つて、あら心安や、ざつと濟んだと申すこととでござる。大名、これではうどした。助けずばなるまい。冠者、お助けなされたがようござりませう。大名、これ／＼わごりよの命を、最早助くるでもおられないぞ。入間、身共が命を助けもなさらねば、忝うもござらぬ。大名、(大笑あり)さて／＼をかしいことかな。やい／＼太

定 必定といふに同じ。

弓矢八幡 弓矢の道の祖神たる八幡に誓を立つる意。

ほうどした 行詰つたの意。

おられない 御座らぬの意。

京折り 京都にて折いたる扇は上等の品なり。

郎冠者命を助かつて忝うないと云ふは、可笑しいことではないか。何ぞ遣つて入間言葉を聞かう。これ／＼、この扇は京折りでもなければ、そなたへ進ずるでもおられないぞ。入間、「京折りでもござらぬ扇を下されも致さねば、満足にも存じませぬ。大名、(大笑あり)さて／＼可笑しい物を貰うて嬉しうないと云ふは、これ／＼、この太刀かたなは重代なれども、遣るでもおられないぞ。入間、重代でもござらぬ太刀かたなを下されもなされねば、祝著にも存ぜぬ。大名、(大笑あり)なう／＼可笑しや、可笑しや、何をやつても嬉しうないと云ふ。太郎冠者も何ぞ遣つて、入間言葉を聞かぬか。冠者、いや、私は何も遣る物もござらぬ。大名、やあ、この袴、小袖もやつて、入間言葉を聞かう。さあ／＼脱がせ、脱がせ。なう／＼、この袴、小袖は、水に濡れも致さねば、其方におまらするでもおりやらぬぞ。入間、これは

結構にもない袴小袖を下されも致さねば嬉しうもござらぬ。大名まだ嬉しうないといふ。さてもく可笑しいことかな。入間言葉は面白いものかな。

入間一段の仕合せでござる。すかさうと存ずる。大名なうなう、これ、先づ戻りやるな。入間いやこれを置いて参るまい。大名いや、用がおりない。先づ戻りやるな。入間何事でおりにやる。大名何と、その如くに色々の物貰うて、眞實は嬉しうか、嬉しうないか、おしやれ。入間いや忝うもござらぬ。大名いや、それは入間やう。最早入間言葉をさらりと捨てて、眞實は嬉しうか、嬉しうないか、おしやれ。入間眞實は思しめしてもござらうぜ。この如くに太刀刀袴小袖まで下されて、何がさて忝うもござらぬ。大名はてさてくだい人ぢや。その入間言葉をさらりと止めて、眞實をおしやれ。入間眞實は何かござ

すかさう はつさう。

入間やう 入間風。

らう。この如くに結構なものさま、下されて、忝うないと云ふことがござらうか。身にあまりて忝うござる。大名何と、忝い。入間なか。大名忝いとは、忝うないと云ふことであらう。こちへ返せ。入間いや、遣ることでないぞ。大名どうでも返さぬか。さあ取つたぞ。入間やい、たらしめ、どこへやることでないぞ。

やるまいぞ、やるまいぞ、やるまいぞ。

〔狂言記下〕

たらしめ 人を欺す者。

狂言記 元禄年間刊行せられたる繪入狂言記の中。

二六 落花の雪

俊基朝臣は、先年土岐十郎頼貞が討たれし後、召捕られて鎌倉まで下り給ひしかども、様々に陳じ申されし趣げにもとて赦免せられたりけるが、又今度の白狀どもに、専ら陰謀の企、彼の朝臣にありと載せたりければ、七月十一日に、又六波羅へ召捕られて、關東へ送られ給ふ。再犯赦さざるは法令の定むる所なれば、何と陳ずとも許されじ、路次にて失はるるか、鎌倉にて斬らるゝか、二つの間をば離れじと思ひ設けてぞ出でられける。

落花の雪に踏迷ふ、交野の春の櫻狩、紅葉の錦を着て歸る、嵐の山の秋の暮、一夜を明す程だにも、旅寝となれば物憂きに、恩愛の契淺からぬ、我が故郷の妻子をば、行方も知らず思

ひ置き、年久しくも住みなれし、九重の帝都をば、今を限りと顧みて、思はぬ旅に出で給ふ、心の中ぞ哀なる。

憂きをば留めぬ逢坂の關の清水に袖ぬれて、末は山路を打出の濱、沖を遙かに見渡せば、潮ならぬ海にこがれ行く、身をうき舟の浮沈み、駒もとゞろと踏鳴らす、勢多の長橋打渡り、行きかふ人にあふみ路や、世をうねの野に鳴く鶴も、子を思ふかと哀なり、時雨もいたく守山の、木の下露に袖ぬれて、風に露散る篠原や、篠分くる道を過行けば、鏡の山はありとても、涙に曇りて見え分かず、物を思へば夜の間に、老蘇の森の下草に、駒を止めて顧みる、古郷を雲や隔つらむ。

番場醒が井柏原、不破の關屋は荒れはてて、猶もる物は秋の雨の、いつか我が身の尾張なる、熱田の八劍ふし拜み、汐干に今や鳴海潟、かたむく月に道見えて、明けぬ暮れぬと行く

俊基朝臣 藤原氏。後醍醐天皇の寵眷を得、資朝と共に興復の謀に參し、事露はれ、辯疏して漸く解く。後に又僧文觀の陳述によりて再び捕へられ、元弘二年鎌倉にて殺さる(一一九九二)七月 元弘元年。

交野の春「又やみむ交野のみ野の櫻がり花の露ちる春の曙(藤原俊成)交野は大阪府北河内郡にあり。紅葉の錦「朝まだき嵐の山の寒ければ紅葉の錦きぬ人ぞなき(藤原公任)」

逢坂の關「あふ坂の關の清水にかげ見えて今やひくらむ望月の駒(紀貫之)」

うねの野「近江より朝立ちくればうねの野にたづぞ鳴くなるあけぬこの夜は(古今集大歌所御歌)時雨もいたく「白露も時雨もいたくもる山は下葉のこらず色づきにけり。」(紀貫之)

鏡の山は「鏡山いざ立ちよりて見て行かむ年經ぬる身は老いやしぬると」(大伴黒主)

汐干に今や「さよ千鳥聲こそ近くなる海潟傾く月に潮やみつらむ(藤原季能)

みちの末はいづこと遠江濱名の橋の夕汐に、引く人もなき
捨小舟しづみはてぬる身にしあれば、誰かあはれとゆふ暮

の、入相なれば今はとて、池田の宿に着
き給ふ。

旅館の燈かすかにして、雞鳴曉を催
せば、匹馬風に嘶えて、天龍川を打渡り、
小夜の中山越えゆけば、白雲路を埋み
来て、そことも知らぬ夕暮に、家郷の天
を望みても、昔西行法師が「命なりけり」
と詠じつゝ、二たび越えし跡までも、羨
ましくぞ思はれける。

隙行く駒の足早み、日已に亭午に昇
れば、かれいひ進らするほどとて、輿を



命なりけり「年たけてまた
越ゆべしと思ひきや命な
りけり小夜の中山」
〔西行法師〕

庭前に昇き止む、轅をたゝきて警固の
武士を近づけ、宿の名を問ひ給ふに、「菊
川と申すなり。」と答へければ、承久の合
戦の時、院宣書きたりし咎に依りて、光
親卿關東へ召下されしが、此の宿にて
斬られし時、

昔南陽縣菊水、波下流而延齡、
今東海道菊川、宿西岸而終命。

と書きたりし、遠き昔の筆の跡、今は我
が身の上になり、あはれやいと増り

けむ、一首の歌を詠じて宿の柱にぞ書かれける。

いにしへもかゝるためしをきく川の

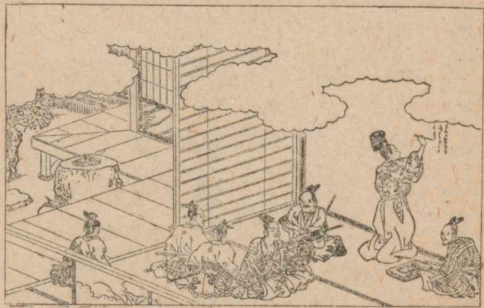
おなじ流に身をや沈めむ



光親卿 中納言宗行卿の撰
ならんといふ。

大井川を過ぎ給へば、都にありし名を聞きて、龜山殿の行幸の嵐の山の花ざかり、龍頭鷓首の舟に乗り、詩歌管絃の宴に侍りし事も、今は二たび見ぬ夜の夢と成りぬと思ひ續け給ふ。

島田・藤枝にかゝりて、岡邊の眞葛うら枯れて、ものの悲しき夕暮に、宇都の山邊を越えゆけば、鳶・楓いと茂りて道もなし。昔、業平の中將の住所を求むとて、東の方に下る時、夢にも人に逢はぬなりけり。」と詠みたりしも、かくやと思ひ知られたり。



龜山殿 京都の西郊嵯峨にある龜山の離宮。

挿繪 菊川宿（東海道名所圖繪）

夢にも人に一駿河なるうつの山へのうつしにも夢にも人にあはぬなりけり。（伊勢物語）

清見潟を過ぎ給へば、都に歸る夢をさへ、通さぬ波の關守に、いと涙を催され、向ひはいづこ三保が崎、興津蒲原うち

過ぎて、富士の高嶺を見給へば、雪の中より立つ煙、上なき思に比べつゝ、明くる霞に松見えて、浮島が原を過行けば、汐干や浅き船浮きて、おり立つ田子のみづからも、浮世を廻る車返し、竹の下道行きなやむ、足柄山の峠より、大磯・小磯見おろして、袖にも波はこゆるぎの、急ぐとしもはなけれども、日數つもれば、七月二十六日の暮ほどに、鎌倉にこそ着き給ひけれ。

—太平記—

富士の高嶺を「富士の根の煙はなほぞ立ちのぼる上なきものは思なりけり」（藤原家隆）

太平記 四十卷。作者不詳。花園天皇の文保二年より後村上天皇の正平二十二年まで五十餘年間の戦亂に關することを記せり。

一七 東路の旅

東山の邊なるすみかを出でて、逢坂の關打過ぐる程に、駒ひきわたる望月の頃もやうく、近き空なれば、秋霧たちわたりて、深き夜の月影ほのかなり。木綿付鳥かすかに音づれて、遊子なほ残月に行きけん函谷の有様思ひ合はせらる。昔蟬丸といひける世捨人、この關のあたりに藁屋の床を結びて、常は琵琶を弾きて心をすまし、大和歌を詠じて懷を述べけり。嵐の風の烈しきを侘びつゝ、ぞ過しける。

古の藁屋の床のあたりまで

心をとむるあふさかの關

關山を過ぎぬれば打出濱、粟津原など聞けども、未だ夜の中なればさだかにも見え分かず。昔天智天皇の御代、大和の

東路の旅 作者は四條天皇の仁治三年(一〇七三)八月十日過ぎにこの旅を起す。逢坂の關 今の天津市の南の逢坂山にありし古關。所謂三關の一。桓武天皇の延暦十四年(一〇四五)に廢す。

駒ひきわたる云々 拾遺集

に「逢坂の關の清水にかけ見えて今やひくらん望月の駒。紀貫之」と。

遊子云々 和漢朗詠集に

「遊子猶行於殘月、函谷鵝鳴。賈島」と。

蟬丸 盲人。宇多天皇の皇子敦實親王の雜色。琵琶の名手。

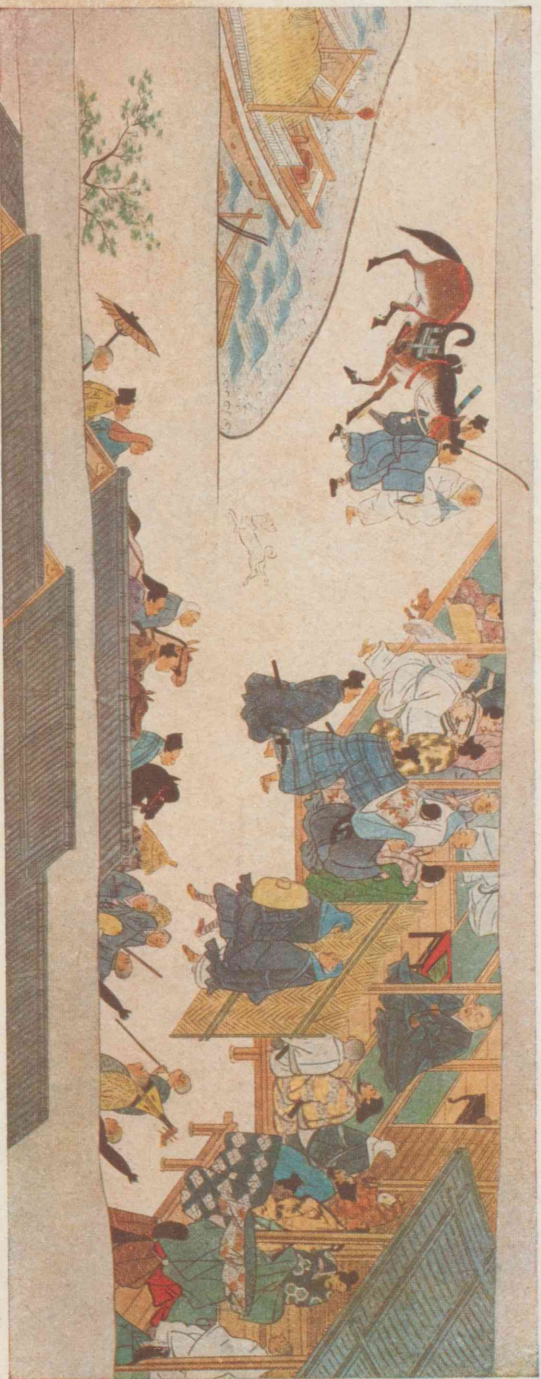
藁屋の云々 今昔物語に

「世の中はとてまかくても過してん宮も藁屋もはてしなれば。蟬丸」と。

關山 逢坂山を指す。

打出濱 天津市の一部。

粟津原 天津市の東南。膳所町の内。



(傳繪入) 藤法) 旅 風 の 代 時 倉 録

國飛鳥の岡本宮より近江の志賀の郡に都遷ありて、大津宮を造られけりと聞くにも、このほどは古き皇居の跡ぞかしと覺えてあはれなり。

さゞ波や大津の宮のあれしより

名のみ残れる志賀のふるさと

この程をも行きすぎて、野路といふ處に到りぬ。草の原露繁くして、旅衣いつしか袖の雫とこぼれし。篠原といふ處を見れば、西東へ遙に長き堤あり。北には里人住家を占め、南には池の面遠く見え渡る。向ひの汀、緑深き松のむらだち、波の色も一つになり、南山の影を浸さねども、青くして混濁たり。洲崎處々に入りちがひて、葦かつみなどおひ渡れる中に、鴛鴦鴨の打群れて飛びちがふさま、葦手を書けるやうなり。昔都を立つ旅人、この宿に泊りけるが、今は打過ぐるたぐひの

飛鳥の岡本宮

高市郡岡本村。舒明天皇の二年(三三〇)より六年間の皇居。後、

齊明天皇の二年(三三六)に都と定まり、天智天皇の六年(三七七)まで十二年間の皇居。

大津の宮 近江國滋賀郡滋賀村にありき。大津市の北四軒。

野路

近江國栗太郡老上村野路。瀬田の東北四軒。

篠原 同國野洲郡。

南山の影云々 白氏文集に

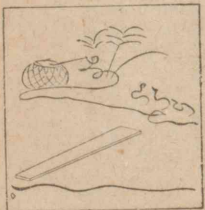
「昆明春、昆明春、春池岸

古、春流新。影浸、南山、

青混濁。波沈、西山、紅淵

淪」と。

葦手



み多くして、家居もまばらになりゆくなど聞くこそ、變りゆく世の習、飛鳥の川の淵瀬には限らざりけめと覺ゆ。

行く人もとまらぬ里となりしより

荒れのみまさる野路の篠原

ゆき暮れぬれば、武佐寺といふ山寺のあたりに泊りぬ。まばらなるとこの秋風、夜更くるまゝに身にしみて、都にはいつしか引きかへたるこゝちす。枕に近き鐘の聲、曉の空に音づれて、かの遺愛寺の邊の草の庵の寢覺もかくやありけん。とあはれなり。行く末遠き旅の空、思ひ續けられていといたう物悲し。

都出でていくかもあらぬ今宵だに

かたしきわびぬとこの秋風

音に聞きし醒が井を見れば、蔭暗き木の岩根より流れ出

飛鳥の川云々 一五八頁註
参照。

武佐寺 近江國蒲生郡武佐村の長光寺。
とこ 同國大山郡床山。彦根町の北。

枕に近き云々 白樂天の詩に「遺愛寺鐘欲枕聽。香爐峰雪撥簾看」と。
遺愛寺 支那の江西省香爐峰にある寺。

醒が井 近江國坂田郡。

づる清水、あまり涼しきまですみ渡りて、實に身にしむばかりなり。餘熱未だ盡きざる程なれば、往還の旅人多く立ちよりにて涼み合へり。かの西行が、

道のべに清水流るゝ柳かけ

しばしとてこそ立ちとまりつれ

と詠めるもかやうの處にや。

道のべの木蔭の清水むすぶとて

しばしすゝまぬ旅人ぞなき

柏原といふ處を立ちて、美濃國關山にもかゝりぬ。谷川霧の底にもおとづれ、山風松の梢にしぐれわたりて、日影も見えぬ木の下道、あはれに心ぼそし。越えはてぬれば、不破の關屋なり。萱屋の板庇年經にけりと見ゆるにも、後京極攝政殿の「荒れにし後はたゞ秋の風」とよませたまへる歌おもひ出

柏原 近江國坂田郡。
不破の關屋 美濃國(岐阜縣)不破郡關が原町にその遺跡あり。

後京極攝政 藤原良經。兼實の第二子。建永元年(一一九二)薨、年三十八。
荒れにし云々 新古今集に「人すまぬ不破の關屋の板びさし荒れにし後はただ秋の風」と。

でられて、この上は風情もめぐらし難ければ、鄙しき言の葉をのこさんもなか／＼に覺えて、此處をば空しく打過ぎぬ。株瀨川といふ處にとまりて、夜ふくるほどに川端に立出でて見れば、秋の最中の晴天、清き川瀨にうつろひて、照る月なみも數みゆるばかりに澄みわたれり。二千里の外の故人の心、思ひやられて、旅の思いと、抑へ難く覺ゆれば、月の影に筆を染めつゝ、花浴を出でて三日、株瀨川に宿して一宵、しばしば幽吟を中秋三五夜の月に傷ましめ、かつ／＼遠情を前途一千里の雲に送る。など、ある家の障子に書きつくるついでに、

知らざりき秋のなかばの今宵しも

かゝる旅寝の月を見んとは

東關紀行下

株瀨川 美濃國不破郡にある川。今は川筋かはれり。
照る月なみ云々 拾遺集に「水の面に照る月なみをかぞふればこよひそ秋の最中なりける。源順」と。
二千里の外云々 白樂天の詩に「三五夜中新月色。二千里外故人心」と。

一八 おどろのした

御門はじまり給ひてより八十二代に當りて、後鳥羽院と申すおはしましき。御諱は尊成、これは高倉院第四の御子、御母は七條院と申しき。治承四年七月十五日生れさせ給ふ。文治元年三月二十五日御年六つにて位に即かせ給ひけり。御門いとおよすげてかしくおはしませば、法皇もいみじううつくしとおぼさる。文治二年十二月一日御書始なまはじりせさせ給ふ。御年七つなり。建久元年正月三日、御年十一にて御元服し給ふ。おなじき三年三月十三日に法皇崩れさせ給ひし後は、御門ひとへに世を知ろしめして、四方の海波靜かに、吹く風も枝を鳴らさず、世治り民安くして、あまねき御うつくしびの浪、秋津島の外まで流れ、繁き御惠、筑波山の陰よりも

高倉

- 安(一) 德(御母建禮門院)
- 安貞親王(御母七條院)
- 惟明親王
- 後鳥羽(御母七條院)
- 七條院 藤原稚子。修理大夫信隆の女。高倉天皇の妃。
- 治承四年 紀元一八四〇年
- 文治元年 紀元一八四五年
- およすげ 年よりもませてあること。
- 法皇 後白河法皇。
- うつくし 可愛きこと。
- 書始 童子の始めて書物を讀む儀式。
- 建久元年 紀元一八五〇年
- うつくしび 慈愛。

深し。よろづの道々に明らけくおはしませば、國に才ある人多く、昔に恥ぢぬ御代にぞありける。中にも敷島の道なむすぐれさせ給ひける。御歌かず知らず人の口にある中にも、

奥山のおどろのしたもふみわけて道ある世ぞと人に知らせむ

と侍るこそ、まつりごと大事と思されけるほど著く聞えて、いとみじく、やむごとなくは侍れ、

建久九年正月十一日、第一の御子四つになり給ふに、御位譲り申させ給ひており給ふ。御年十九位におはします事十四年なりき。今日明日二十ばかりの御齡にて、いとまだしかるべき御事なれども、よろづところせき御ありさまよりは、なかく、やすらかに、御幸など御心のまゝならむとにや。世を知ろしめす事は、今もかはらねば、いとめでたし。

敷島の道 和歌の道。

おどろ 雜草・荊棘などのむらがり生ぜる處。

やむごとなし 貴し。

第一の御子 土御門天皇。

まだしかるべき 未だ御讓位し給ふ御壽にあらざるをいふ。
ところせき 窮屈なるさま

鳥羽殿、白河殿なども修理せさせ給ひて、常に渡り住ませ

給へど、猶また水無瀬といふ處に、えもいはずおもしろき院づくりして、しばしば通ひおはしましたつ、春秋の花紅葉につけても、御心ゆくかぎり世をひゞかして、遊をのみぞし給ふ。處がらも、はるくくと川に臨める眺望、いと面白くなむ。元久の頃、詩に歌を合はせられしも、とりわきてこそは。

見わたせば山もとかすむみなせ川ゆふべは秋となに思ひけむ

萱葺の廊渡殿など、はるくくと艶にをかしうせさせ給へり。御前の山より瀧おとされたる石のたゞずまひ、苔深き深山木に枝さしかはしたる庭の小松も、げに千世をこめたる霞の洞なり。前裁つくろはせ給へる頃、人々あまた召して御遊などありける後、定家の中納言、いまだ下臈なりける

白河殿 山城國愛宕郡にありし離宮。
水無瀬 攝津國三島郡島本村大字廣瀬。

心ゆくかぎり 思ふ存分に。
世をひゞかして 世人を驚かす意。
元久の頃 土御門天皇の御宇(一八六四—一八六六)

廊渡殿 本殿より釣殿・泉殿・對の屋等に通ずる廊をいふ。
霞の洞 仙人の栖處。轉じて、上皇の御所に申す。定家 藤原俊成の子。新古今・新勅撰集の撰者。仁治二年歿、年八十。(二八二—二一九〇—)

下臈 官位の低きもの。

時に奉られける、

あり經けむ本の千年にふりもせでわが君ちぎるみ

ねのわか松

君が世にせきいる、庭をゆく水の岩こす數は千世

も見えけり

今の攝政は院の御時の關白基通のおとゞ、その後は後京極殿と聞え給ひし、いと久しくおはしき。このおとゞはいみじき歌の聖にて、院の上おなじ御心に和歌の道をぞ申し行はせ給ひける。文治の頃千載集ありしかど、院いまだきびはおはしまししかばにや、御製も見えざるを、當帝位の御ほどに、また集めさせ給ふ。土御門の内のおとゞの二郎君右衛門督通具といふ人を始にて、有家の三位、定家の中將、家隆、雅經などに宣はせて、昔より今までの歌をひろく集めらる。

基通 近衛基實の子。

後京極殿 藤原良經。九條

兼實の子。博く衆藝に通

じ、最も和歌に長ず。攝

政太政大臣に至る。建永

元年歿、年三十八。

(一八二九—一八六六)

文治の頃 文治三年(一八

四七)藤原俊成、千載和歌

集を撰す。

きびは、幼少なること。

土御門の内のおとゞ 源通

親。

通具 正二位大納言に至る

有家 藤原重家の子。從三

位に叙せらる。

藤原家隆 一代の詠歌六萬

首に上る。宮内卿に任ぜ

らる。嘉禎三年歿、年八

十。(一八一八—一八九

七)

雅經 藤原賴經の子。參議

に至る。家を飛鳥井と稱

す。承久三年歿、年五十二

(一八三〇—一八八一)

おのゝ奉れる歌を、院の御前にて自らみがきとゞのへさせ給ふさまいと珍らしく面白し。この時も、先に聞えつる攝政殿とりもちて行はせ給ふ。

この撰集より先に、千五百番の歌合せさせ給ひしにも、勝れたる限りを撰ばせ給ひて、その道の聖達判じけるに、やがて院も加はらせ給ひながら、猶このなみには立ちおよび難しと卑下させ給ひて、判のことばを記されず、御歌にて勝り劣れる志ばかりをあらはし給へり。なかゝいと艶に侍りけり。上のその道をえ給へれば、下も自ら時を知るならひにや、男も女も、この御代にあたりてよき歌よみ多く聞え侍りし中に、宮内卿の君といひしは、村上の御門の御後に、俊房の左のおとゞと聞えし人の御末なれば、はやうはあて人なれど、つかさ淺くてうちつゞき四位ばかりにて失せにし

この撰集 新古今和歌集。千五百番歌合。仙洞百番歌合ともいふ。二十卷あり。

なみ 列。同じ列。

判のことば 批評の言葉。

宮内卿 後鳥羽天皇の宮女。

巨勢師光の女。畫文をよ

くす。

俊房 村上天皇の皇子、具

平親王の孫。

はやうは 以前は。

あて人 貴人。

失せにし人 右京大夫源師

光。

人の子なり。まだいと若きよはひにて、そこひもなく深き心
 ばへをのみよみしこそ、いと有り難く侍りけれ。この千五百
 番の歌合せの時、院の上宣ふやう、こたみは皆世にゆりたる
 古き道のものどもなり。宮内卿はまだしかるべけれども、け
 しうはあらずと見ゆめればなむ、かまへてまるが面おこす
 ばかりよき歌仕うまつれ。と仰せらるゝに、面うち赤めて、涙
 ぐみて候ひけるけしき、限りなきすきのほどもあはれにぞ
 見えける。さてその百首の歌、いづれもとりくゝなる中に、
 うすくこき野邊のみどりの若草に跡まで見ゆる雪
 のむらぎえ

そこひもなく 際限もな
 ぐ。
 ゆりたる 名人として許さ
 れなる。
 けしうはあらず 悪くはあ
 らず。
 かまへて 氣をつけて。
 面おこす 面目を立つ。

のむらぎえ

草の緑の濃き薄き色にて、去年のふる雪の遅く疾く消えけ
 るほどをおし量りたる心ばへなど、まだしからむ人はいと
 思ひより難くや。この人年積るまであらましかば、げにい
 ばかり目に見えぬ鬼神をも動かしましに、若くて失せに
 し、いといとほしく、あたらしくなむ。

かくて、この度撰ばれたるをば、新古今といふなり。元久二
 年三月二十六日、竟宴といふこと、春日殿にて行はせ給ふ。
 いみじき世のひゞきなり。かの延喜の昔おぼしよそへられて、
 院の御製、

石の上かみふるきを今にならべこし昔のあとをまたた
 づねつゝ

攝政殿

敷島ややまことばの海にして拾ひし玉はみがか
 れにけり

次々つぎつぎ流るめりしかど、さのみはうるさくてなむ。
 かくて、院の上は、ともすれば水無瀬殿にのみ渡らせ給ひ

目に見えぬ云々「力をも入
 れずして、天地を動かし、
 目に見えぬ鬼神をもあは
 れと思はせ、猛き武士の
 心をも慰むるは歌なり」
 (古今集序)
 あたらし 惜し。

竟宴 勅撰集や書物の進講
 終りたる時に催す祝宴。
 春日殿 一條道の北にあり。
 延喜の昔 醍醐天皇の延喜
 五年。古今集の撰ばれし
 時をいふ。
 おぼしよそへられて 思ひ
 あはせられて。
 石の上 ふるきにかゝる枕
 詞。

攝政 藤原良経。

ずん流る 順流るにして、
 次々に言ひ出す意。

て、琴笛の音につけ、花紅葉のをりくゝにふれて、よろづの遊
びわざをのみ盡くしつゝ、御心ゆくさまにて過させ給ふ。誠
によろづ世もつきすまじき御世の榮、次々今よりいと頼も
しげにぞ見えさせ給ふ。御碁うたせ給ふついでに、若き殿上
人ども召して、これかれ心のひきくゝに挑み争はせさせ給
へば、あるは小弓、雙六などいふ事まで、思ひくゝに勝負をさ
うどきあへるも、いとをかしう御覽じて、さまぐゝの興ある
賭物どもとうでさせ給ふとて、なにがしの中將を御使にて、
修明門院の御方へ、何にても、をのこどもに賜はずべき賭物」
と申させ給ひたるに、とりあへず、小さき唐櫃の金物したる
が、いと重やかなるを參らせられたり。この御使の人、何なら
むといといぶかしくて、かたはしほのあけて見るに、錢なり。
いと心得ずなりて、さと面うち赤めて、あさましと思へる氣

殿上人 清涼殿の殿上の間
に伺候することを許され
し人々にいふ。四位・五
位、並に六位の藏人。

ひき 心の好む方。
さうどき 争ひ騒ぐ意。

とうて 「取出て」の音便。

修明門院 藤原重子。順徳
天皇の御母。

色しるきを、院御覽じおこせて、朝臣こそむげに口惜しくは
ありけれ。かばかりの事知らぬやうやはある。古より殿上の
賭弓といふ事には、これをこそ賭物にはせしか。されば今賭
物と聞えたるに、これをしもいだされたるなむ、古の事知り
給へるこそいたきわざなれ」とほゝゑみて宣ふに、さは悪し
く思ひけりと、心地騒ぎておぼゆべし。

大方この院の上は、よろづの事にいたり深く、御心も花や
かに、物に委しうぞおはしましける。

夏の頃、水無瀬殿の釣殿にいでさせ給ひて、氷水めして、水
飯やうのものなど、わかき上達部殿上人どもにたまはせて、
大御酒まゐるついでにも、あはれ古の紫式部こそはいみじ
くはありけれ。かの源氏物語にも、「ちかき川の香魚、西川より
奉れる石伏やうのもの御前にて調じて」と書けるなむ、勝れ

いたきわざ 俗に「えらい
こと」といふに同じ。

上達部 三位以上の人々。
但し参議は四位なるもこ
の内に入る。

大御酒 酒のこと。大も御
も美稱なり。

紫式部 藤原爲時の女。實
名は傳はらず。源氏物語
の作者。

源氏物語 五十四帖。光源
氏君父子を中心にして、當
時の上流社會の有様を寫し
たる小説。この事は常夏の
巻に見ゆ。

西川 桂川をいふ。
石伏 川魚の一種。

てめでたきぞとよ。只今さやうの料理仕りてむや。など宣ふを、秦のなにがしとかいふ御隨身、勾欄のもと近く候ひけるが、うけたまはりて、池の汀なる小笹を少ししきて、白き米を洗ひて奉れり。ひろはば消えなむとにや。これもけしかるわざかな。とて、御衣脱ぎてかづけさせ給ふ。御土器たびく、聞しめす。何事もめでたく見えさせ給ふ御ありさま、千歳をふとも飽く世あるまじかめり。

一増 鏡

かくて義時世を靡かし、したゝめ行ふことも、ほとく古きには越えたり。まめやかにめざましき事も多くなりゆくに、院の上、忍びておぼしたつこともあるべし。近く仕うまつる上達部、殿上人、まいて北面の下藤、西面などいふも、皆この方にほめきたるは、且暮弓矢、兵仗のいとなみより外の事なし。劔などを御覧じ知ることさへいかで習はせ給ひたるにか、道の者にも稍たち勝りて賢く在します。

(増 鏡)

御隨身 身分ある人に官より付けらるゝ護衛の役。ひろはば云々 源氏物語帯本の巻に、ひろはば消えなむと見ゆる玉笹の上の裳云々。けしかるわざ 變つたことの意味にして、ほめたる言。かづく 衣を賜ふこと。

増鏡 十卷。後鳥羽天皇の御誕生より後醍醐天皇の御代まで百五十年間のことを記したる歴史。作者未詳。

一九 隨筆文學の本質

土居光 知

萬葉集と古今和歌集との比較によつて、平安朝の初には、興味を中心が刹那より連続へ、個體的より典型的へ移りつゝあつたことを感ずると同時に、反省する心が目ざめて、實感の率直な告白より進んで、想像力による構成的表現の力を得つゝあつたことが察せられる。當時の人々が日記をつけたことは、彼等が始めて反省的になり、自我を連続の相のもとに見出さんとしたが爲であらう。

日記は現存せるもの他にもあつたことは、紫式部日記及びその他の日記を綜合して作つたらしい榮華物語によつても推察される。また光源氏が須磨に於て繪日記をつけ、「紫の上もわが御有様を日記のやうに書き給へり。」などある

土居光知 明治十九年高知縣に生る。英文學者。東北帝國大學教授。
萬葉集 二十卷。撰者不詳。仁徳天皇の朝より淳仁天皇の朝に至る四百餘年間の和歌四千四百九十六首を漢字の音訓を以て記録せるもの。
古今和歌集 二十卷。勅撰歌集の最初のもの。延喜五年(美色紀貫之・紀友則・凡河内躬恆・壬生忠岑の四人勅を奏じて撰す。

紫式部日記 二卷。紫式部が上東門院に宮仕せし時の日記なり。
榮華物語 四十卷。世継物語ともいふ。作者不明。宇多天皇より後朱雀天皇までのことを載せ、ことに藤原道長のことを詳述せり。

句からも、日記をつけることが、教養あり、徒然わぶる當時の人々の常であつたやうに想像される。かゝる日記は、多くは三人稱で書かれ、表現も回顧的であつた。蜻蛉、更級、和泉式部日記等は和歌が中心であつて、他の部分は後に歌が作られた事情を想ひ出して叙述したと考へらるゝ節が多い。蜻蛉日記の後半は短篇小説に近づいてゐる。伊勢物語は在五中將日記と稱せられ、和泉式部日記は和泉式部物語とも稱せられた。

されば、平安朝の日記文學は抒情詩と物語との中間に位置するものである。自己の生活を反省し、その抒情的に高潮した刹那々々を聯結して表現し、連續の相のもとに人生を觀照する態度は、更に自由に想像力を活かして人生を描かんとする態度に進みゆくのが自然である。物語は汝と我との

紫の上 光源氏の妻。
蜻蛉日記 八卷。右大將道綱の母の作。天曆八年より天延六年まで二十一年間に於ける、作者の身邊に起れることを年月のもとに記せり。

更級日記 一卷。菅原孝標の女の作。紀行を主とす。

和泉式部日記 一卷。長保五年四月より翌寛弘元年正月までの日記。

記・記 古事記・日本書紀。

關係の推移を内容とする。記・記は外なる世界の歴史であり、萬葉集は内なる世界の刹那の告白であり、物語は心の世界の歴史である。平安朝の女詩人は、かの年代史的な外面的歴史を輕んじ、心情の歴史を重んじたことは、源氏物語や更級日記の文によつても想像される。

しかし紫式部の考へた心の世界の價值は、餘りに主觀的であつて、未だ超主觀的なものを知らなかつた。そこには心情の推移が興味を中心になつてゐる。而してその心情の必然的展開といふことは未だ自覺に上つてゐなかつた。奈良朝以後の人々は狭い主觀の世界に閉籠り、平安朝の貴族は權勢や官位を得んとする運動と、歌舞・遊樂の生活以外に爲すことなく、殊に上流の婦人は「御衣がち」に几帳の後に坐し、世間的な經驗を殆ど持たなかつたのである。精神の成長は、

更級日記云々 更級日記に「源氏を一の卷よりして人も交らず几帳のうち」にうち臥してひきいてつ

主觀と超主觀的なものとの親密な交渉が保たれ、絶えず後者が内化されることによつて可能になる。主觀に閉籠つた人々は道徳的意識も臃げであり、未だ成長する個性ではなかつた。展開なき連續は弛緩、倦怠、分裂に終る。連續的な姿にせんとすれば却つて不徹底な、なまぬるい表現になることを感じた人々は、刹那の潑刺たる印象をそのままに書きつけた。それは枕草子、徒然草の如き隨筆文學である。

萬葉集と徒然草とを比較するに、前者には素樸な純一さがあり、後者には複雑を通過した簡潔さがある。前者は刹那に生きた人々の表現であり、後者は連續の世界を分裂した刹那に集中した精神の表現である。和歌に於ても古今和歌集以後の典型的趣味を超えて、再び印象的な、叙景的な表現に赴いた新古今和歌集の新鮮味は、同一の傾向から生れた

つ見る心地、後の位も何かはせむ。晝は日ぐらし、夜は目のさめたる限り、火を近くともしてこれを見るより外のことしなれば、自ら名などはそらに覚え浮かぶをいみじきことに思ひ云々」
御衣がち ことしくしく衣服を着飾りて、そのために容姿は隠されて、只衣服のみ見ゆる様にいふ。

枕草子 清少納言の隨筆。異本多くして卷數も異なり。なほ卷九「歌より物語へ」參照。

新古今和歌集 二十卷。建仁元年十一月三日、後鳥羽上皇の詔を承けて、源通具・藤原有家・藤原定家・藤原家隆・藤原雅經・寂蓮法師等が撰進せるものにて、短歌千九百八十八首を分類列載せり。別に藤原長經の和文の序、藤原親經の漢文の序あり。

ものであらう。

奈良朝の歌人は純樸であつたが、平安朝の文學者は感傷的になつた。平安朝の優秀な作家は皆、縣歩行の國守か、その子女であつて、地方の素樸な生活に接觸し、それと堂上貴族の浮華な生活とを對照して眺め得る位置にあつた。彼等は地方人の蒙昧のうちにある時は都に憧れたであらうが、宮仕をするに及んでは、外面の光彩に心醉することなく、絶えず反省を促されたであらう。藤原氏に私、有された文明は、制限された極めて狭苦しいものであつて、貴族生活を讚美することなくしては、その中に迎へ入れらるゝことなく、一言の非難もその圈外に放逐されたであらう。されば彼等の言葉は婉曲をきはめ、思ふことを臃にうちかすめ、人生の批評を言葉の奥深く秘めなければならなかつた。彼等は主觀的

でありながら主觀を直截に表現し得なかつた。かくて文章のリズムは低く、細やかな調子となり、その表現は不徹底になつた。源氏物語に表現された世界は、永遠の黄昏の沈滞した空氣が垂籠め、描かれた人々は優柔不斷である。平安朝の文明は裝飾の要素が多く、外面の華美によつて内部の貧弱を補はうとしてゐた。貴族等は只享樂の日の永遠に連續せんことを希ふのみで、展開は恐ろしいことであつたらう。當時の佛教は、國々に國分寺を建てた奈良朝の、人道的熱誠もなく、個人の壽福を祈る加持祈禱教となり、寺院、法會、僧侶、讀經等、皆貴族の官能を喜ばすやうに裝飾化された。疫病^{もの}のけの怖に悩み、享樂の生活によつて無氣力にされた當時の人生には、奈良朝の晴朗は影も留めてゐない。當時の秀でた人々には、この不徹底さを逃れんとする希望が早くから

動いてゐた。貫之は諧謔と典型美とによつて悲哀を忘れようとしてゐるが、蜻蛉日記の著者は當時の婦人の苦悶をかなり深刻に表現した。和泉式部は宮仕の浮沈多き生活と僧庵の靜かな生活との對照を夢のやうに感じた。紫式部は美的生活に對する興味と冥想の傾向とを有し、初めは前の傾向に従つて現實と理想とを調和しようとしたが、晩年には後の傾向に従つたやうである。主觀に生きることは、その奥に超主觀的なものを見出すのでなければ、唯自己の世界を狭めるのみである。更級日記の著者は、物語と幻想とのうちに生き、夢と現實との區別もなかつた。夢が賣買されたのはこの時代のことである。藤原氏の榮華が衰微し始めた時、その黄金時代の追懷に現實を忘れようとしたことが、榮華物語などの書かれた動機であらう。併し沈滞は息苦しいほど

夢が云々 「玉葉」 「宇治拾遺物語」 「曾我物語」などに、その事實を記せり。

になり彌縫と虚飾とによつて内部の糜爛を隠して來た文明は全く行詰つて潰滅した。こゝに人生をはかなみ、これに執著するを迷妄とし、享樂を罪惡とする厭世觀が盛になつたのは自然である。西行や長明はこの思潮の代表者といふべきである。

平安朝の「つれづれ」といふ語は、世紀末のアンヌイといふ語を聯想せしめる。

紫式部はその作品を中宮に奉る際に、

「されど徒然におはしますらむ。またつれづれの心を御覽ぜよ。」

と書いてゐる。これは紫式部日記が書かれた動機を語つてゐる句であらう。源氏物語を讀んでも、遊樂がつれづれを慰める爲に行はれたことが多かつたのを感じる。つれづれと

中宮

上東門院を指す。

は展開なき沈滞の悩み、充實した人生を見出し得ざる悶えではあるまいか。

兼好が、

「つれづれなるまゝに日ぐらし硯に向ひて、心に移り行くよしなしごとをそこはかとなく書附くれば、あやしうこそ物狂ほしけれ。」

と書いたのは、充實した生活、展開する思惟に入ることが出來ぬ。この途を見出さんがためには分裂した刹那の斷想をそのまゝに誌して、我が姿を如實に眺めなければならぬ。然るに何といふ混亂した姿であらう。そして統一に赴くべき途も見出し得ない故に物狂ほしさを感ずる。といふ如き意味ではなからうか。西行や長明は社會と人生とに背き、自然の愛、彼岸の宗教に逃れようとした人であるが、兼好はこの

對立の一半を捨てて、他の半面に生きるには餘りに複雑な心の所有者であつた。彼の心中には平安朝の美的趣味と鎌倉室町時代の厭世觀とが争つてゐた。彼にとつて、つれづれわぶる「心は靜寂主義に赴かんとする心である。彼は「佛に仕う奉るこそつれづれもなく、心の濁も清まるこゝちすれ」というて、社會生活を離れようとしてゐる。しかし一方には來世の信仰に生きることの出來ぬ現實を尊重する心をもつてゐた。彼は非常に官能的であり、平安朝の教養を重んじ、有識者ぶり、古き世を戀ひ、家居の趣味等に風雅の心を述べるかと思ふと、やがて清貧を崇拜し、名利を求むる心を卑しんでゐる。そして彼が死を直視し、人生の無常を痛感したことは、却つて生の價値を切實に感じ、自己を知り、自己に忠實になり、自己に集中しようとした。かゝる複雑な精神内容を統

一することは、當時に於ては不可能であつた。彼は未完成の精神を尙び、無差別論者であつて、彼の著作は一貫した主張のない、結論のない批評となつた。そこには現實から理想を見る皮肉、理想から現實を見る諷刺、理想が理想を笑ふ自嘲がある。徒然草は國文學中稀に見る緊縮した文章であつて、辯證論的な考へ方の眞摯さがある。之を消閑の戲筆と見ることは不可能である。

—文學序説—

辯證論的 直觀・經驗によらず、概念を分析して事の理を研究すること。

三 花はさかりに

吉田兼好

花はさかりに、月は隈なきをのみ見るものかは。雨に對ひて月を戀ひ、垂れこめて春のゆくへ知らぬも、猶あはれになさけ深し。咲きぬべきほどの梢散りしをれたる庭などこそ、見所おほけれ。歌の詞書にも、花見にまかれりけるに、早く散りすぎにければ、とも障る事ありてまからで、なども書けるは、花を見て、といへるに劣れることかは。花の散り、月の傾くを慕ふならひは、さる事なれど、殊にかたくななる人ぞ、この枝、かの枝、散りにけり。今は見所なし。などはいふめる。よろづの事も、はじめ終こそをかしけれ。

望月の隈なきを、千里の外までながめたるよりも、曉近くなりて待ちいでたるが、いと心深う、青みたるやうにて、深き

山の杉の梢に見えたる木の間の影、うちしぐれたる叢雲がくれのほど、又なくあはれなり。椎柴、白樫などの濡れたるやうなる葉の上に、きらめきたるこそ、身にしみて、心あらむ友もがなと、都戀しう覺ゆれ。すべて月花をば、さのみ目にて見るものかは、春は家をたち去らでも、月の夜は、閨の内ながらも思へるこそ、いとたのもしうをかしけれ。

よき人は、ひとへに好けるさまにも見えぬ、興ずるさまもなほざりなり。片田舎の人こそ、色濃くよろづはもて興ずれ。花のもとには、ねぢ寄り、たち寄り、あからめもせずまもりて、酒飲み、連歌して、はては、大きな枝、心なく折取りぬ。泉には、手足さし浸して、雪には、おり立ちて、あつつけなど、よろづのもの、よそながら、見ることなし。

さやうの人の祭見しさま、いとめづらかなりき。見ごと

吉田兼好 本姓下部氏。後村上天皇の正平五年歿、年六十九。(一九四二—二〇一〇) 隈なき 暈なき。垂れこめて云々「垂れこめて春のゆくへも知らぬ間に待ちし櫻も移るひにけり」(古今集、藤原因香)

叢雲 椎の木の叢だちたるをいふならんと。白樫 樫に白樫・赤樫の二種あり。さのみ そんなに。

色濃く しつこく。あからめ よそ目。

祭 賀茂神社の祭。

とおそし。そのほどは、棧敷不用なり。」とて、奥なる屋にて酒飲
み、物くひ、圍碁、雙六など遊びて、棧敷には人を置きたれば、渡
り候ふ。といふ時に、各肝つぶるゝやうに、争ひ走りのぼりて、
落ちぬべきまで、簾はり出でておし合ひつゝ、一事も見もら
さじとまもりて、「とありかゝり」と、物毎にいひて、渡り過ぎぬ
れば、また渡らむまで、「といひておりぬ。唯物をのみ見むとす
るなるべし。都の人のゆゝしげなるは、睡りていとも見ず。若
く末々なるは、宮仕に立ちぬ、人の後にさぶらふは、様悪しく
も及びかゝらず、わりなく見むとする人もなし。

上徒然草一

棧敷不用なり 棧敷に居る
必要はない。

徒然草 二卷。兼好法師の
著。我が國隨筆の代表的
名作。文段抄以來分けて
二四三段とす。

二 春は曙

清 少 納 言

清少納言 清原元輔の女。
一條天皇の皇后定子に仕
ふ。

春は曙やうく、しろくなりゆく山際すこしあかりて、紫
だちたる雲のほそくたなびきたる。

夏は夜月の頃はさらなり、闇もなほ螢飛びちがひたる。雨
などのふるさへをかし。

秋は夕ぐれ。夕日花やかにさして、山の端いと近くなりた
るに、鳥の寝どころへゆくとして、三つ四つ二つなど飛びゆく
さへあはれなり。まいて雁などのつらねたるが、いとちひさ
く見ゆる、いとをかし。日入りはてて、風のおと蟲のねなど、い
とあはれなり。

冬はつとめて、雪のふりたるはいふべきにもあらず、霜な
どのいと白く、又さらでもいと寒きに、火などいそぎおこし

て、炭もて渡るもいとつきたくし。晝になりて、ぬるくゆるびもてゆけば、炭櫃、火桶の火も、白き灰がちになりぬるはわろし。

にくきもの いそぐ事ある折に、長言するまらうど、あなづらはしき人ならば、のちになどいひても追ひやりつべけれども、さすがに心はづかしき人、いとにくし。硯に髪の入りにすられたる。又墨の中に石こもりて、きしくときしみたる。俄にわづらふ人のあるに、驗者もとむるに、例ある所にはあらでほかにある、尋ねありくほどに、待遠に久しきを、辛うじて待ちつけて、喜びながら加持せさするに、この頃物のけに困じにけるにや、居るまゝにすなはちねぶり聲になりたる、いとにくし。火桶炭櫃などに、手の裏うち返し、皺おしのべ

などしてあぶり居る者、いつかは若やかなる人などのさはしたりし。老いばみうたてあるものこそ、火桶のはたに足をさへもたげて、物いふまゝにおしすりなどもすらめ。さやうの者は、人のもとに來て、居むとする所を、まづ扇して塵拂ひすてて、居もさだまらずひろめきて、狩衣の前しもざまにまくり入れても居るかしか、かゝる事は、いひがひなき者のさにはやと思へど、少しよろしき者の、式部の大夫、駿河の前司などいひしが、させしなり。

・物うらやみし、身のうへなげき、人のうへいひ、露ばかりの事もゆかしがり、聞かまほしがりて、いひ知らせぬをば、怨じそしり、又、わづかに聞きわたる事をば、われもとより知りたる事のやうに、こと人にも語りしらべいふも、いとにくし。物聞かむと思ふほどに泣くちご。鳥の集りて飛びちがひ鳴き

たる。ねぶたしと思ひて臥したるに、蚊の細聲に名のりて顔のもとに飛びありく。羽風さへ身のほどにあるこそ、いとにくけれ。

物語などするに、さし出でてわれひとりさいまくる者、すべてさしいでは、わらはも大人も、いとにくし。昔物語などするに、わが知りたりけるは、ふと出でていひくたしなどする、いとにくし。鼠のはしりありく、いとにくし。あからさまに來たる兒ども、わらはべをらうたがりて、をかしき物など取らするにならひて、常に來て居入りて、調度やうち散しぬる、にくし。

うつくしきもの。ふりにかきたるちごの顔。雀の子のねずなきするにをどりくる。又、へにつけて居ゑたれば、親雀の

蟲などもて來てくゝむる、いとらうたし。三つばかりなるちごの、急ぎて遣ひくる道に、いとちひさき塵などのありけるを、目ざとに見つけて、いとをかしげなるおよびにとらへて、大人などに見せたる、いとうつくし。尼にそぎたるちごの、目に髪のおほひたるを搔きは遣らで、うちかたぶきて物など見る、いとうつくし。たすきがけにゆひたる腰のかみの、白うをかしげなるも、見るにうつくし。おほきにはあらぬ殿上わらはの、さうぞきたてられてありくもうつくし。をかしげなるちごの、あからさまに抱きてうつくしむ程に、かいつきて寝入りたるもらうたし。雛の調度。蓮の浮葉のいとちひさきを、池より取りあげて見る。葵のちひさきも、いとうつくし。何も何もちひさき物は、いとうつくし。いみじう肥えたるちごの二つばかりなるが、白ううつくしきが、二藍のうすものな

ど、衣長くて、たすきあげたるが這ひ出でくるも、いとうつくし。八つ九つ十ばかりなるをこの聲をさなげにて文よみたる、いとうつくし、鶏の雛の足高に、白うをかしげに、衣みじかなるさまして、ひよくとかしがましく鳴きて、人のしりに立ちてありくも、また親のもとにつれだちありく、見るもうつくし。かりの子、舍利の壺、瞿麥の花。

心ゆくもの よく書いたる女繪の詞をかしう續けて多かる。白く清げなるみちのく紙に、いとほそう書くべくはあらぬ筆して文かきたる。川舟の下りさま、齒黒のよかつきたる。てうばみして、てう多くうちたる。物よくいふ陰陽師して、河原に出て、すその被したる。よる寝起きて飲む水。

―枕草子下

枕草子 異本多くして卷數一定せず。清少納言の隨筆。

三 船 路

紀 貫 之

男もすといふ日記といふものを、女もして見むとするなり。その年の師走の二十日あまり一日の日の戌の時に門出す。そのよしいさゝかものに書きつく。

ある人、縣の四とせ五とせ果てて、例のことども皆しをへて、解由などとりて、住む館より出でて、舟に乗るべき處へ渡る。かれこれ知る知らぬ送りす。年ごろよく具しつる人々なむ、別れがたく思ひて、その日しきりにとかくしつゝの、しるうちに夜更けぬ。

八日。さはることありて、なほ同じ所なり。こよひ月は海にぞ入る。是を見て、業平のきみの「山の端にげて入れずもあらなむ」といふ歌なむおぼゆる。もし海べにてよまましければ、波

紀貫之 歌人。古今集撰者。御書所預・大内記・

土佐守・玄蕃頭・木工權頭に歴任。天慶九年(一六〇)歿。年六十五。

その年 朱雀天皇の承平四年(一五九)。

住む館 國守の館。土佐の國府は長岡郡にありき。

八日 承平五年正月八日。

たちさへて入れずもあらなむともよみてましや。今この歌
を思ひいでて、或人のよめりける。

照る月の流るゝ見れば天の川

出づるみなとは海にざりける

とや。

九日のつとめて、大湊より那波の泊を追はむとて漕ぎ出
でけり。これかれ互に、國の境のうちはとて、見送りに來る人
あまたが中に、藤原言實・橘季衡・長谷部行政等なむ、御館より
出で給ひし日より、こゝかしこにおひくる。この人々ぞ志あ
る人なりける。この人々の深き志はこの海にも劣らざるべ
し。これより今は漕ぎはなれて行く。これを見送らむとてぞ、
この人どもはおひ來ける。かくて漕ぎゆくまに、海のほ
とりに留まれる人も遠くなりぬ。舟の人も見えなくなりぬ。岸

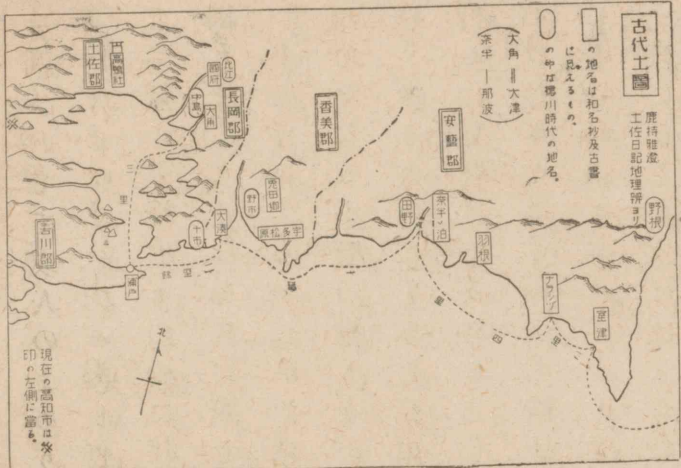
大湊 土佐國(高知縣)長岡
郡
那波 同國安藝郡。

にもいふ事あるべし。舟にも思ふことあれどかひなし。かゝ
れば、この歌をひとりごとにし
てやみぬ。

おもひやる心は海をわ
たれどもふみしなけれ
ば知らずやあるらむ

かくて宇多の松原をゆき過
ぐ。その松の敷いくそばく、幾千
年経たりと知らず。もと毎に浪
うちよせ、枝毎に鶴ぞとびかふ
おもしろしと見るに堪へずし
て、舟人のよめる歌、

宇多の松原 土佐國香美郡
岸本村宇田。



みわたせば松のうれ毎にすむ鶴は

千代のどちとぞおもふべらなる

とやこの歌は、處を見るにえまさらず。かくあるを見つゝ漕ぎゆくまに、山も海も皆暮れ、夜更けて西東も見えずして、天氣の事楫取りの心に任せつ。男もならはぬはいとも心細し。まして女は舟底に頭をつきあてて、音をのみぞ泣く。

十六日、けふの夕つかた、京へのぼるついでに見れば、山崎のたななる小櫃の繪も、まがりのほらのかたもかはらざりけり。賣る人のこゝろをぞ知らぬ」とぞいふなる。かくて京へ行くに、島坂にて人あるじしたり。かならずしもあるまじきわざなり。たちて行きし時よりは、くる時ぞ人はとかくありける。これにもかへりごとす。

夜になして京には入らむと思へば、急ぎしもせぬ程に、月出でぬ。桂川、月の明きにぞわたる。人々のいはく、「この川飛鳥

十六日 承平五年二月。山崎 山城國(京都府)乙訓郡大山崎村。

島坂 同國乙訓郡向日町の西。

桂川 大堰川の下流。飛鳥川 大和國高市郡稽淵山に發し、飛鳥村を経て北流、大和川に合す。世のなかは何か常なる飛鳥川昨日の淵ぞ今日は瀬になる(古今集)

川にあらねば、淵瀬さらにかはらざりけり」といひて、あるひとのよめる歌、

ひさかたの月におひたる桂川

そこなる影もかはらざりけり

又或人のいへる、

あまぐものはるかなりつるかつら川

袖をひでてもわたりぬるかな

又或人よめり、

かつら川わが心にも通はねど

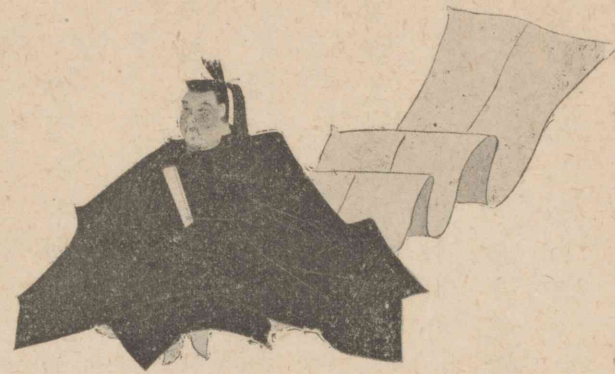
おなじ深さにながるべらなり

京のうれしきあまりに、歌もあまりぞおほかる。夜ふけて、ところどころも見えず。京に入りたちてうれし。

家にいたりて門に入るに、月あかければいとよくありさ

ま見ゆ。聞きしよりもまして、いふかひなくぞ毀れやぶれたる。家をあづけたりつるひとの心も荒れたるなりけり。中垣こそあれ、ひとつ家のやうなれば、のぞみてあづかれるなり。さるは、たよりごとく物も絶えず得させたり。こよひかゝることと、こわだかにもものいはせず。いとほつらく見ゆれど、こゝろざしはせむとす。

さて池めいてくぼまり、水づける所あり。ほとりに松もありき。五年六年のうち、千年やすぎにけむ。片枝はなくなりけり。今おひたるぞまじれる。おほかたみな荒



挿繪 紀貫之畫像。

れにたれば、あはれとぞ人々いふ。思ひ出でぬことなく思ひ戀しきがうちに、この家にて生れし女子のもろともにかへらねば、いかがはかなしき。船人も皆子いだきてのゝしる。かかるうちに、なほかなしみに堪へずして、ひそかに心しれる人といへりける歌。

うまれしもかへらぬものをわがやどに
小松のあるを見るがかなしき
とぞいへる。猶あかずやあらむ、又かくなむ。

見し人を松の干とせに見ましかば
遠くかなしきわかれせましや
忘れがたくくちをしきこと多かれど、えつくさず。

—(土佐日記)—

土佐日記 一卷。紀貫之が任地土佐國より京都に歸る時の日記。

三三 文學の新生

久松 潜 一

國文學の精神とは何であるか、といふことは、國文學に關心を持つ場合に想到する問題であるが、或は月花を愛でるといふ優美な意味に取られてゐる場合も多いであらう。然し能く考へて見れば、もつと生活的意味の深い種々の方面があるに相違ない。私は茲に、國文學を流れる精神として、「まこと」と「ものあはれ」と「幽玄」といふ三つの點について考へて見ようと思ふ。

第一に「まこと」の精神とは、有るが儘のもの、即ち眞實を有るが儘に表現する精神をば中心としてゐる。是が上古の國文學を貫く精神であると見られると思ふ。これを内容的思

潮的方面から見る時に、そこには強い國家的な精神と個人的な精神とが現れて居ると思ふ。國家的精神は、古事記を中心として見られる精神である。この國家は神に依つて作られ、宇宙や人類も亦神に依つて作られたと見るのであつて、神を中心として生きる精神である。同じ神の中に自然神もあり人格神もあり、人格神の中に英雄神もあり祖先神もあり、色々であるが、何れにしても自己より偉大な神に依つて生きる精神は、古代人の眞實な心持のまゝ、古事記に表現されてゐるのである。固よりそこには想像もあり超現實的な事も多いのであるが、後世の如く意識的に創作したものはなく、彼等に眞實なものとして映じたものが其の儘に傳はつてゐるのである。この神に依つて天地や國土が作られ、人類も生み出されるのである。英雄は愛と力との二つの精

久松潜一 明治二十七年愛知縣に生る。國文學者。東京帝國大學文學部助教。

神の統一された意識である。而してこの神は、英雄の事件を通じて國家統一の精神が見られる。而してこの國家的精神は古代人の眞實な精神であつて、それが其の儘に表現されたのが古事記である。これをよりよく藝術的に表現しようといふやうな意識はなく、たゞ古代人の眞實な精神が現れてゐる。固よりそこには想像もあり、後世から見て有り得べからざる超現實的な事も多いのであるが、而して後世のやうに意識的に創作したものではなく、彼等には眞實なるものとして映じたのであつて、子供の描くお伽噺の世界は、空想的であり超現實的ではあるが、子供にとつては眞實な世界であるのと同様である。そこにまことの精神が見られると思ふ。

この國家的の精神と共に、一方には個人的なる精神が、萬葉集を中心として見ることが出来るのである。固より萬葉集にも國家的意識は見えるのであつて、人麿の歌を見ても、國家の建設を説き神の世界を歌つてゐるし、その他にも神や國家の觀念が現れてゐる幾多の例を萬葉集中に見出すのであるが、しかし萬葉集の中心となる精神は、個人的の精神であると思ふ。即ち人麿は國家の建設を説き神を歌つてゐるが、その中心は皇子の薨去を悼む哀痛の感情にある。即ちその神は、國家的觀念を背景として、個人的な抒情的精神を表してゐるのである。斯く個人的精神から出發して居る萬葉集の種々な感情や精神は、一方には自然の方に只管なる愛を向けるやうになり、捉はれない自然の中に身を投げ入れて、そこに自己と自然とが一つになつた境地が見られるのである。更に又一方には、人生に向つて情熱的な愛を歌

人麿 柿本人麿。傳未詳。持統・文武兩天皇に仕ふ。歌聖。

皇子の薨去を悼む 萬葉集

卷二に、高市皇子（天武天皇の皇子）の死を悼む長歌あり。

ひ、または儂き人生に享樂すべきを歌ひ、又或は儂い世であつても、現實にある間は、現實をよりよく生きて行かうとする、強い現實に對する愛を歌つてゐる精神も見えるのである。斯くの如くにして萬葉集に見える個人的精神は、前の神や國家を中心にして古事記に見える國家的精神と共に、上古文學精神の重要な二つの内容となつて居るが、何れも素樸な眞實な「まこと」の精神が中心となつてゐると思ふ。

この素樸な「まこと」の感情を中心とする上代人の物の見方を見詰めて行けば、第一に、一元的綜合的である。事象を觀察するに、すべて一のものとして見るのである。神と人、自然と人、を一つのものとして眺めるのである。第二に、率直で積極的である。すでに一元的綜合的であつて分析的でない以上、すべて見方が單純であり、紆餘曲折がない。第三に、物を觀察す

るのに多く具象的である。歌を詠むにも目に觸れた事象を先づ歌ふ。神話の如き超現實的な事柄をも具象的に表現する。かくして對象を有るが儘に直觀し、これを直接的に表現するのである。さうしてこの精神は、文化が爛熟した時、常に復古的精神として現れて來るのである。復古的精神とは、單に字義通り古に復る事ではなく、有るが儘に見る「まこと」の精神が中心となつてゐるのであつて、古代人の眞實性と素樸性とに復ることが其の精神である。

例へば平安朝の末期に於て、現實生活に頽廢と行き詰りを生じて、苦悶と憂愁とを感じた時、實朝は萬葉集の精神に復つて、その素樸性と眞實性とを求めたのであると思ふ。かくて實朝の心境を見れば、

山はさけ海はあせなん世なりとも

實朝 源實朝。頼朝の第二子。征夷大將軍。右大臣。承久元年（一一七〇）、鶴岡八幡社頭にて、明公曉に刺されて死す。年二十八。

君にふた心わがあらめやも

には、君と國家に對する強い忠の精神(國家的精神)が表れてゐる。その一方には、

いとほしや見るに涙もとゞまらず

親もなき子の母をたづぬる

に於けるが如く、人間的な愛の精神が強く見られるのである。また自然を歌ふにしても、實朝の歌には、萬葉時代のやうに有りの儘を見つめる、さうして有りの儘に表現するといふ態度が現れてゐる。

第二に「ものあはれ」の精神は「もの」の中に見出した「あはれ」の精神である。有るが儘の「もの」の上に見出した有るべき世界である。それは、心と形との調和の中に見出される情熱

の世界であるともいへる。本居宣長は詠歌疑條といふ著書の中に、源氏物語の中から「ものあはれ」といふ言葉を十二語拾つて、この精神こそ源氏物語の基調であるとし、また平安朝文學の基調として居る。それは上古文學の中に見える素樸な感情ではなく、それを飽くまで洗煉した境地である。有るが儘の「もの」から、有るべき「もの」を見出し、それを高揚せしめた境地である。高天原の岩戸の前の神樂に「あはれ、あなたおもしろ、あなたとし」とある。「あはれ」はそれである。随つてそれは、春の朝の朗かな感情にも、秋の夕の寂しさの感情にも見出される精神である。此の精神は、平安朝文學の凡ての形態の上に見出されると思ふ。而して「ものあはれ」の意識の展開の上からいふと、最初は限定されない自由な「もの」の上に自由に「あはれ」を創造したのに對して、次第に「あはれ」が固

定し、觀念化されて、その固定し、觀念化された「あはれ」を以て、「もの」を見るやうになつた結果、「もの」が次第に限定されるに至つた。斯くて「あはれ」と「もの」とが著しく限定され特殊化されて、それだけ自由な生々とした「もの」と「あはれ」とが失はれて來たと思はれる。平安朝時代の「もの」の「あはれ」は、この境地に立つものが多いのである。

これを歌の上に見るに、平安朝の歌は、萬葉時代のやうに感情を直接的に表現するに比し、それを反省するところから理智的傾向になる點がある。随つて強烈な感情を沈靜にし、情趣化することにもなる。古今集の歌がそれである。ここに素樸的から技巧的な點を生ずると思ふ。平家物語は敘事詩的の物語であるが、勇壯な戦闘の間を彩つて流れてゐるものは、「もの」の「あはれ」の精神である。さうして、そこに華やかな

な勇壯な悲壯美を形作つてゐるのだと思ふ。

第三に「幽玄」の精神を考へて見たい。古今集の眞名序に「或事關神異、或興入幽玄」とあつて、本來は「もの」の「あはれ」と略、相近い意味であるが、平安朝末期の世相の轉變から人生の無常を觀じ來り、宗教的の考が深く入り込んで、物寂しい境地を主とするやうになつた。俊成が得意の歌として、

ゆふされば野邊の秋かぜ身にしみて
うづら鳴くなり深草のさと

を擧げたと傳へられる點から見ても、その邊の消息がわかるであらう。西行が自然の中に放浪することによつて、その靜寂の境地を見出して來たのもそれである。美しく咲く櫻の花蔭に潛む靜けさ、寂しさを見出したのが西行であつた。

古今集の眞名の序 古今和歌集の漢文の序文。紀淑望の著。

俊成 藤原俊成。歌人。千載和歌集の撰者。元久元年（八四四）歿、年九十一。ゆふされば云々 千載集卷四に出づ。

さうして、その「幽玄」は、俊成のよく言ふ「遠白い」即ち「壯大といふ感情と、心が細い」即ち「繊細といふ情趣とを結びつけ、統一した中に見出される精神である。さうして此の精神は、更に一步進めて考へれば、近古文學を流れる傳統的的精神や、個人を否定して普遍の中に生きようとする精神と一致するものがあると思ふ。平安時代に於ては、個人を中心としてゐる個性の中に文學が作られてゐる。而も近古に於ては、個人の弱さはかなさを觀じた結果、傳統の中に自己の生命を見出さうとしたのである。阿佛尼の十六夜日記は、平安時代の女性の日記と異つて、自己を生かすよりは子を中心として、以て家の傳統の中に生きる精神が見られる。この家を存續せしむることによつて自己の生命を永遠ならしめようとする精神は、歌の家を作り、傳授といふが如き現象を作り出し

阿佛尼

大納言藤原爲家の

室。中納言冷泉爲相の母。

鎌倉時代の女流歌人。弘

安六年（西暦一〇七〇）歿。

十六夜日記

阿佛尼の繼子

爲氏が實子爲相の所領を

横領せしにより、それを

訴へる爲、阿佛尼が建治

三年（西暦一一三三）十月十六日京

都を出發して鎌倉へ下り

しその紀行。

た。これ等は個性的であるべき文學を傳統の中に入れることによつて、生々とした歌の生命を失ひはじめた事は事實であるが、そこに文學思潮の一面が見られると思ふ。

即ち文學を個性的にその儘表現せず、これを傳統の型の中に入れて、そこからいぶしにかけた上で表現するのである。大きな自由の精神を、型といふ窮屈な狭い物の中に入れて、それを凝縮し結晶せしめて、そこから水晶のやうな透明な物を作り出さうとするのである。これは徒然草に見える道といふことによつてもわかる。即ち天性その器量はなくとも、その道を精進してゆく時には、堪能であつてもたしなまなないものよりも、すぐれた上手の人となるのであつて、天下の上手と謂はれるものも、初めは不能の聞えもあつたのであるが、道を守つて放埒をしない爲に、天下の名人となる

のである。愚にして慎めるは巧にして恣なるに優る、といふのは、畢竟道は一つの型の中に入れて精練して始めて優れたものとなる、と考へたのである。そこに専門家を敬する心持が出で、型の文學或は道の文學を重んずる心持が生ずるのである。この型の中に入れることによつて、その小さい我が否定された中から現れて來る大きな自我、こゝに「幽玄」は現れて來ると思ふ。茶にしても庭にしても、型の中に入つて而も型に捉はれない自由な境地を見出して來るのではあるまいか。それは、最も小さいものの中にある最も大きい生活である。さうしてこれは、室町時代の藝術を代表する能樂に於ても見られる所である。一つの型の中に普遍的な人間性を現さうとしてゐる。世阿彌のいふ「幽玄」の精神もやはり其處にあると思ふ。此の「幽玄」は、近世文學に於ては更に芭蕉

世阿彌 名は元清。觀世清次の長子。足利義滿・義教に仕ふ。能樂の大成者。嘉吉三年(二〇三)歿、年八十一。

の閑寂の精神ともなつて居る。芭蕉は自然を深く凝視して、その本質を「さび」であると見たのみならず、此の「さび」に徹して「さび」を生活の上に見出して來てゐる。若し極小の生活の中に極大の生活を生かす事が「さび」の生活であつたとすれば、一蓑一笠の旅の中に、大きな生活を營んだ彼は、自然の本質が「さび」であると見たのみならず、人間生活の本質もこの「さび」にあると見出した、と言へる。高く心を悟りて俗にかへるべし。といふのは、生活を「さび」化し「幽玄」化することであると解せられる。斯くの如くにして、自然と人生との窮極であるところの「さび」や「幽玄」は、又、藝術の窮極でもあつたのである。

有るが儘のものに理念を見出した境地が「まこと」であり、

有るが儘のものの中から、あらうとするものを見出して表現したのが「ものあはれ」であり、更に自然と人生と藝術とを結びつけて、それをいぶしにかけて、統一せしめ結晶せしめた大白光の如き境地が「幽玄」であらう。童のやうな素樸さから、華やかな境地となり、さうして「さび」に達するのである。斯くの如く見る時、「まこと」と「ものあはれ」と「幽玄」とは、一見異なる理念のやうで、而も本質的な相違ではなく、展開のそれ／＼の過程である。「まこと」が童心と素樸との藝術を生み出し、「ものあはれ」が心と形との融合調和した藝術を生み出し、「幽玄」が凡べての大きな自然や人生を型の中に入れて、その間から結晶した白光として現さうとする、ある點から言へば、象徴的の藝術を生み出したと思ふ。さうして、これ等の展開流動する精神を統一したもの、そこに國文學の本質

が見出されるであらう。

―上代日本文學の研究―

新制中等新國文卷九終

落合 直文 (歌) 二五二—二五三

大西博士全集

櫻牛全集

子規全集

新樂劇論 (二五四)

紅葉全集

落合直文集

〔餘裕派小説〕

アララギ (二五六)

〔口語詩〕

國文學全史

獨歩全集

白樺 (二七〇)

日本歌學史 (二七七)

啄木全集

漱石全集

國語と國文學 (二六四—)

櫻木全集 (二六五)

鴨外全集

大日本國語辭典

〔大衆文藝〕

〔翻譯文學〕

〔童話・童話〕

日露戰爭起る (二六四)

文藝協會成る (二六六)

自然主義

新浪漫主義 (二七〇)

世界大戰起る (二七〇)

新理想主義

新現實主義

社會問題

圓本流行 (二六七)

日支事變起る (二五九)

滿洲國成立 (二五九)

大正 (二五三—二五六)

大正

今上 (二五六—)

昭和

綱島 梁川 (評論) 二五六—二五七
 國木田獨歩 (小説) 二五三—二五六
 二葉亭四迷 (小説) 二五三—二五六
 藤岡作太郎 (國) 二五三—二五七
 高崎 正風 (歌) 二四六—二五七
 石川 啄木 (歌) 二四五—二五七
 夏目 漱石 (小説) 二五七—二五八
 上田 敏 (詩) 二五七—二五八
 佐々 政一 (國) 二五三—二五七
 黒岩 涙香 (小説) 二五三—二五八
 森 鷗外 (小説) 二五三—二五八
 大町 桂月 (文) 二五九—二六五
 内藤 鳴雪 (俳) 二五七—二五六
 芳賀 矢一 (國) 二五七—二五七
 沼波 瓊音 (俳) 二五七—二五七
 芥川龍之介 (小説) 二五五—二五七
 徳富 蘆花 (小説) 二五六—二五七
 大槻 文彦 (國) 二五七—二五八
 若山 牧水 (歌) 二五五—二五八
 小山内 薫 (劇) 二五三—二五八
 田山 花袋 (小説) 二五三—二五九

國文學史年表 (近世—現代)

天皇(御在位)	紀皇	著名作家(生年—歿年)	著作物	參		
天 皇 (御在位) 後陽成 (三〇六—三二七) 文祿 慶長 (三七—三九七) 後水尾 (三七—三九七) 元和 寬永 (三八九—三〇〇) 明 正 (三八九—三〇〇) 後光明 (三〇〇—三〇四) 正保 慶安 (三〇〇—三〇四) 承應 (三〇四—三〇七) 後 西 (三〇四—三〇七) 明曆・萬治・寬文 (三〇七—三〇七) 靈 元 (三〇七—三〇七) 延寶 (三〇七—三〇七) 天和 (三〇七—三〇七) 貞享 (三〇七—三〇七) 東 山 (三〇七—三〇七) 元祿 (三〇七—三〇七)	2450 桃 園 (四〇七—四三三) 寬延 寶曆 (四三三—四四〇) 後櫻町 (四四〇—四四〇) 明和 (四四〇—四四〇) 後桃園 (四四〇—四四九) 安永 (四四九—四七七) 光 格 (四四九—四七七) 天明 寬政 享和 文化 (四七七—四七七)	2400 紀 海音 (劇) (三三三—三四〇) 八文字屋自笑(小説) (三四〇—三四五) 竹田 出雲 (劇) (三四五—三四六) 賀茂 眞淵 (國) (三五七—四三九) 加賀の千代 (俳) (三六—四四三) 富士谷成章 (國) (三九八—四三九) 谷口 燕村 (俳) (三九八—四四三) 横井 也有 (俳) (三六二—四四三) 伊勢 貞丈 (故實) (三七五—四四四) 大島 蓼太 (俳) (三六—四四七) 大窪 詩佛 (詩) (四二七—四四八) 柄井 川柳 (川柳) (三八—四四〇) 加舎 白雄 (俳) (三九—四四五) 朱樂 菅江 (狂歌) (三九—四四〇) 本居 宣長 (國) (三九—四四〇) 小澤 蘆庵 (歌) (三八—四四三) 唐衣 橘洲 (狂歌) (四三—四四三) 加藤 千蔭 (歌) (三九—四四六) 上田 秋成 (國) (三九—四四六) 村田 春海 (國) (四六—四七一) 山東 京傳 (小説) (四二—四七六)	2350 熊澤 蕃山 (儒) (三九—三五) 井原 西鶴 (小説) (三〇—三五) 松尾 芭蕉 (俳) (三〇—三五) 木下 順庵 (儒) (三〇—三五) 徳川 光圀 (學) (三〇—三五) 契沖阿闍梨 (國) (三〇—三五) 北村 季吟 (國) (三六—三六五) 伊藤 仁齋 (儒) (三七—三六五) 榎本 其角 (俳) (三三—三六七) 服部 嵐雪 (俳) (三四—三六七) 貝原 益軒 (儒) (三六—三六七) 森川 許六 (俳) (三六—三六七) 近松門左衛門 (劇) (三三—三六四) 新井 白石 (儒) (三七—三六五) 鯛屋 貞柳 (狂歌) (三四—三六七) 荻生 徂徠 (儒) (三七—三六八) 室 鳩巢 (儒) (三八—三九四) 江島屋其碩 (小説) (三七—三九六) 荷田 春滿 (國) (三六—三九六) 上島 鬼貫 (俳) (三二—三九八)	2300 里村 紹巴 (連歌) (二八—三六〇) 細川 幽齋 (歌) (二九—三七七) 藤原 惺窩 (儒) (三二—三九七) 中江 藤樹 (儒) (三六—三〇八) 木下長嘯子 (歌) (三九—三〇九) 松永 貞徳 (俳) (三三—三三三) 鈴木 正三 (小説) (三三—三三五) 林 羅山 (儒) (三四—三七七) 安原 貞室 (俳) (三七—三三三) 西山 宗因 (俳) (三六—三三三) 山崎 闇齋 (儒) (三七—三三三) 下河邊長流 (國) (三四—三三三)	佛諸御傘 (三三—) 因果物語 (三三—) 二人比丘尼 (三三—) 本朝通鑑 (三四—) 徒然草文段抄 (三七—) 枕冊子春曙抄 (三四—) 萬葉集代匠記 (三三—) 冬の日 出世景清 (三四—) 日本永代藏 (三四—) 奥の細道 (三四—)	徳川家康江戸幕府を開く (三三—) 林羅山幕府に召さる (三三—) 忍岡に聖堂を建つ (三三—)
		2450 仁 孝 (四七—三五〇)	2400 異學の禁 (四五—)	2350 猿蓑集 (三五—) 和字正濫抄 (三五—) 梨本集 (三五—) 長町女腹切 (三六—) 藩翰譜 (三六—) 曾根崎心中 (三六—) 風俗文選 (三六—) 益軒十訓 讀史餘論 (三七—) 國姓爺合戦 (三七—) 駿臺雜話 (三九—) 〔八文字屋本〕 平假名盛衰記 (三九—) 常山紀談 (三九—)	群書類從 (四五—) 東西遊記 (四五—) 古事記傳 (四五—) 東海道中膝栗毛 (四六—) 詞の八衢 (四六—) 浮世風呂初編 (四六—) 琴後集 (四七—) 南總里見八犬傳 (四七—三五〇)	幕府酒落本を禁ず (四五—) 和學講談所設立 (四五—)
		2300 藤原 惺窩 (儒) (三二—三九七)	醒睡笑 〔古書出版〕	徳川家康江戸幕府を開く (三三—) 林羅山幕府に召さる (三三—) 忍岡に聖堂を建つ (三三—)		
		2300 佛諸御傘 (三三—) 因果物語 (三三—) 二人比丘尼 (三三—) 本朝通鑑 (三四—) 徒然草文段抄 (三七—) 枕冊子春曙抄 (三四—) 萬葉集代匠記 (三三—) 冬の日 出世景清 (三四—) 日本永代藏 (三四—) 奥の細道 (三四—)	醒睡笑 〔古書出版〕	徳川家康江戸幕府を開く (三三—) 林羅山幕府に召さる (三三—) 忍岡に聖堂を建つ (三三—)		

吉本考

仁孝 (二四七—二五六)

文政
天保
弘化

孝明 (二五〇—二五七)

嘉永
安政
萬延
文久
元治
慶應

明治 (二五七—二五七)

明治

大正 (二五七—二五六)

大正

今上 (二五六—)

昭和

大窪 詩佛 (詩) 二四七—二四八
柄井 川柳 (川柳) 三八八—三四五
加舎 白雄 (俳) 三九九—四〇五
朱樂 菅江 (狂歌) 三九八—四〇六
本居 宣長 (國) 三九八—四〇六
小澤 蘆庵 (歌) 三九八—四〇六
唐衣 橘洲 (狂歌) 三九八—四〇六
加藤 千蔭 (歌) 三九八—四〇六
上田 秋成 (國) 三九八—四〇六
村田 春海 (國) 三九八—四〇六
山東京傳 (小説) 二四二—四七六
塙 保己一 (國) 二四二—四七六
式亭 三馬 (小説) 二四二—四七六
大田 南畝 (狂歌) 二四九—四八三
小林 一茶 (俳) 二四三—四八七
鶴屋 南北 (劇) 二四三—四八七
石川 雅望 (國) 二四三—四八七
十返舎一九 (小説) 二四六—四九一
長寛 和尚 (歌) 二四八—四九一
頼 山陽 (儒) 二四八—四九一
藤井 高尙 (國) 二四九—五〇二
柳亭 種彦 (小説) 二四九—五〇三
爲永 春水 (小説) 二四九—五〇三
香川 景樹 (歌) 二四九—五〇三
平田 篤胤 (國) 二四九—五〇三
四世 川柳 (川柳) 二四九—五〇三
瀧澤 馬琴 (小説) 二四七—五〇八
橋 守部 (國) 二四七—五〇八
櫻井 梅室 (俳) 二四九—五〇二
鹿持 雅澄 (國) 二四九—五〇三
山東 京山 (小説) 二四七—五〇八
萩原 廣道 (國) 二四三—五〇三
橘 曙覽 (歌) 二四七—五〇八
大隈 言道 (歌) 二四六—五〇八
大國 隆正 (國) 二四三—五〇三
八田 知紀 (歌) 二四九—五〇三
大田垣蓮月 (歌) 二四九—五〇三
成島 柳北 (小説) 二四七—五〇八
河竹默阿彌 (劇) 二四六—五〇五
假名垣魯文 (小説) 二四八—五〇五
樋口 一葉 (小説) 二五三—五〇五
外山 正一 (新詩) 二五八—五〇六
税所 教子 (歌) 二四八—五〇六
大西 祝 (評論) 二五〇—五〇六
高山 樗牛 (評論) 二五二—五〇六
正岡 子規 (俳) 二五二—五〇六
尾崎 紅葉 (小説) 二五二—五〇六
落合 直文 (歌) 二五二—五〇六
網島 梁川 (評論) 二五六—五〇七
國木田獨步 (小説) 二五二—五〇八
二葉亭四迷 (小説) 二五三—五〇九
藤岡作太郎 (國) 二五〇—五〇七
高崎 正風 (歌) 二四六—五〇三
石川 啄木 (歌) 二四九—五〇三
夏目 漱石 (小説) 二五二—五〇六
上田 敏 (詩) 二五二—五〇六
佐々 政一 (國) 二五三—五〇七
黒岩 淚香 (小説) 二五三—五〇七
森 鷗外 (小説) 二五〇—五〇二
大町 桂月 (文) 二五九—五〇五
内藤 鳴雪 (俳) 二五七—五〇六
芳賀 矢一 (國) 二五七—五〇六
沼波 瓊音 (俳) 二五七—五〇七
芥川龍之介 (小説) 二五五—五〇七
徳富 蘆花 (小説) 二五八—五〇七
大槻 文彦 (國) 二五七—五〇八
若山 牧水 (歌) 二五五—五〇八
小山内 薫 (劇) 二五二—五〇八
田山 花袋 (小説) 二五二—五〇九

群書類從 (二四五)
東西遊記 (二四五)
古事記傳 (二四八)
東海道中膝栗毛 (二四六)
詞の八衢 (二四六)
浮世風呂初編 (二四九)
琴後集 (四七)
南總里見八犬傳 (四四—五〇)
修紫田舎源氏 (二四七五)
おらが春 (二四九)
うけらが花 (二四八)
雅言集覽 (二四六)
春色梅曆 (四九)
いろは文庫 (四九六)
俚言集覽
萬葉集古義
中外新聞・江湖新聞
廣日本文典 (二四二)
新體詩鈔 (二四二)
經國美談 (二四三)
言海 (二四四)
小説神髓 (二四五)
浮雲 (二四七)
孝女白菊の歌 (二四八)
日本文學史 (二五〇)
默阿彌全集
〔政治小説〕
〔新體詩〕
桐一葉 (二四五)
金色夜叉 (二五五)
一葉全集
ホトトギス (二五五—)
天地有情 (二五九)
不如歸 (二五九)
國文學史十講 (二五〇)
思出の記 (二五二)
大西博士全集
樗牛全集
子規全集
新樂劇論 (二五四)
紅葉全集
落合直文集
〔餘裕派小説〕
アララギ (二五六)
〔口語詩〕
國文學全史
獨歩全集
白樺 (二五七)
日本歌學史 (二五七)
啄木全集
漱石全集
〔大衆文藝〕
〔翻譯文學〕
〔童話・童話〕
大日本國語辭典
鷗外全集
校本萬葉集 (二五五)
國語と國文學 (二四四—)

異學の禁 (四五)
幕府洒落本を禁ず (二四三)
和學講談所設立 (四五)
ヘルリ來朝 (二五三)
幕府人情本を禁ず (二五三)
淺香社 (二五三)
國粹保存主義
小説の革新
言文一致論
日清戰役起る (二五四)
筑波會・秋聲會
評論の勃興 (二五五)
俳句・和歌・戯曲の改革
根岸短歌會 (二五九)
日露戰爭起る (二五四)
文藝協會成る (二五六)
自然主義
新浪漫主義 (二五〇)
世界大戰起る (二五四)
新理想主義
新現實主義
社會問題
圓本流行 (二五七)
日支事變起る (二五九)
滿洲國成立 (二五九)

